煙に願いを

ふじ　ぷらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
煙に願いを

【Ｎコード】
Ｎ４２８７Ｆ

【作者名】
ふじ　ぷらす

【あらすじ】
大学を中退してニートとなった男。毎日のらりくらりと生活をしていたが、ある日、散歩の途中で魔法のランプを見つける。そのランプは、願い事をなんでも叶えてくれるというものであったが・・・。

1．夕暮れと空き缶

コンッ

「痛てぇ！誰だ！」

ある河原の土手を秋の夕暮れを楽しんでだろうか、もう辺りは薄暗くなって、虫の鳴き声が聞こえる時間帯に、ふらふらと歩いているおっさんの後頭部に空き缶、しかもスチール缶が直撃した。

「やべっ」

空き缶を蹴飛ばした犯人は、一目散に暗闇にまぎれて逃げようとした。

「待ちやがれ！！」

（まったくしつこいおっさんだぜ。いい加減、運が悪かったとあきらめたらどうなんだ？！）

直も犯人は逃げ続ける。犯人の足は速かった。ついにおっさんも観念したのであろうか、その場にへたれこむのが、暗闇の中にシルエットとして浮かんでいた。

「歳の癖に俺に追いつこうってのが間違えているんだ」

その犯人の名前はツトム。努力の努でツトムと読む。年齢は２７歳。大学中退。今は無職。趣味はゲームとギャンブル。同じことのように思われるが、努にとって、それらはぜんぜん違うものであった。それはともかく、努が空き缶を蹴飛ばした理由はちゃんとある。パチンコで５万も負けたということだ。「誰も空き缶を蹴ったところで文句は言うまい。文句といえば、俺だってパチンコで５万も負けりゃ店に文句の一つも言いたくなる」

パチンコで５万も負けたときは、形相を変え、ぴかぴかに磨かれたカウンターへとどしどし向かった。だが、そこにはなんとも綺麗な女がちょこんと立ってにっこりと微笑んでいた。「こんな人に文

句を言ったらかわいそうだ」
　そう思った努は彼女を拝むのに5万を払ったと一旦納得し、店を出た。でも、彼女のそばを離れるとまた怒りがこみ上げてきた。それで、その帰りの道中に空き缶が転がっていたから蹴ったということであった。その後、空き缶がどうなろうと努は知ったことではなかった。
　さて、なぜ無職なのにパチンコにつぎ込む金があるのか？ということについてなのだが、それは努の巧みな話術にある。親や親戚には、
「今、ベンチャービジネスをやっているのだけど、あまりうまく行っていない。それで、軌道に乗るまで援助して欲しい」
という願いを、両親は良心とでも言おうか、そんなもので努に金をせっせと出してくれているのである。

「おかえりなさい」
　努が、古びて地震が来れば一発でぺしゃんことなりそうな家の引き戸をガラガラと開けるなり、母が言った。
「お帰り、お兄ちゃん」
　母が言ったことに対しての反射として、５つ年下の妹が決まり文句を言った。妹は今、一流企業の社長秘書として働いている。そのおかげもあって、家には金が入る。それを努が頂く。なんともうまく出来た構図ではないか。実際、努がそう思っているかどうかは定かではないが・・・。
「御飯出来ているわよ」
　母は努が一日中遊んでいるとも知らずに、
「今日は疲れたでしょう、これでも食べて元気をつけて明日もがんばってね」
と声を掛ける。
　努は何をがんばるのか？それは、決まっている。軍資金を何倍にも膨れ上がらせることだ。

（楽して金が入る。だからギャンブルはやめられない）

ただ、最近ちっとも当たりが来なかった。そして、軍資金がなくなるたびに母親に金をせびるのであった。

「努。明日、山廣おじさんが来ることになってるんだけど、仕事に関して話でも聞いたらどう？」

畳の上に置いてある小さなテーブルを3人で座布団に座って囲みながら肉じゃがをほおばる努に母が言った。

山廣おじさんというのは大学在学中にＩＴ関連の会社を設立し、今やちょっとした企業の社長、いわゆる勝ち組だ。彼は努の父親の兄。つまり、努のおじにあたる。

「まあ、考えとく」

いつものように適当な返事をして場をやり過ごすのが一番だと思い、そう答えた。

次の日、その日は日曜日で、努は家を出る口実が見当たらず、山廣おじさんと顔をあわせることとなった。昼過ぎになって、努はようやく起きた。朝御飯とも昼御飯ともとれる食事をし、そのまま音楽を聴いていた。

ピンポーン

玄関へ走っていった母がいかにも大げさに、

「あらー、よくいらっしゃいました。ささ、どうぞおあがりください」

そう言った後に母は何かに気がついた。

「あら？その怪我どうなさいましたの？あ、すみません。立ち話もなんですから中でその話も含めてゆっくりと。あ、そうそう、努が山廣さんがいらっしゃるのを楽しみにしてましたよ。なにやら仕事について聞きたいことがあるとかって」

母の声が一定の間隔を置いて聞こえてくる。山廣おじさんが途中

で適当な返事をしているのだろうが、声の大きさが足りないらしく、聞こえてこない。母の他所向きの声は目覚まし時計くらいうるさい。

「やあ、努君。久しぶり。元気にしてた？」

まるで子ども扱いだった。

「もう子どもじゃないんすから」

「ははは、そうだったね。それで、今日は私が来るのを楽しみにしていてくれた、って」

母はテンションが上がると何でもかんでも、でまかせでも噂でもばら撒き始める習性があった。絶対に隠し事は出来ないタイプだ。その母は茶菓子と茶を持ってきておじさんの目の前に控え目に置き、努の横にチョンッと座った。

「あれ？」

努もおじさんの異変に気付いた。

「その怪我どうしたんっすか？」

「ああ、これね。全くひどい話だよ。聞いてくれるかい？」

努が聞くとも聞かないとも言わないうちに続けて話し始めた。いや、普通はこんなことに「はい」とは答えないのが日本語なのだが・・・。

「昨日の夕方、この近くの土手を散歩してたんだがね」

と言うのを聞いて努はドキッとした。昨日の空き缶事件を思い出したのだった。

「誰かが蹴飛ばした空き缶が当たってしまってね。私はそいつを追いかけたんだが、どうにもこの歳じゃあ若いものには追いつけないよ。途中で置いていかれてしまった。身長は、そうだなぁ・・・ちょうど努君くらいだったかな？」

いかにも正確に覚えているものだった。

「まあどうせ、いわゆるニートとかいう連中がギャンブルにでも負けて鬱憤晴らしに空き缶を蹴ったところ誰かに当たった。それでヤバイと思って逃げたってところだろうね。まったく親の顔が見てみ

たいよ。そう思わないかい？努君？」
　さすがベンチャービジネスを成功させた人物だけはある。努はその推理が完璧すぎて冷や汗が出てくるくらいだった。それどころか途中で噴出しそうになってしまったくらいだ。そして、親の顔が見てみたいと言っていたが、ちょうど努の横に座っているのがそのお目当ての人物である。
（気が済むまで見ていってくれて構わない）
「それにくらべて努君は偉いよ。先も分からないベンチャービジネスにトライするなんて。おじさんでよかったらいくらでも手を貸すから心配しなくていいよ」
　その後、努はおじさんのベンチャー成功武勇伝を延々と聞かされ、うんざりしたまま、おじさんに携帯電話の電話番号を渡され、「困ったときはいつでも連絡して」と言われてしまった。もちろん電話をかけるつもりなどさらさらないのであったが・・・。

「努、参考になった？」
「うー、まあまあかな」
「そう、よかった。それにしてもおじさんの怪我ひどいわよね」
「怪我そのものはたいしたことないんじゃなかったのか？」
「それはそうだけど、空き缶を蹴って人にぶつけておいて逃げるだなんて、いったい親にどんな教育を受けて育ったのかしら。本当に親の顔が見てみたいっていうおじさんの言葉もよくわかるわ」
　残念ながらその親の顔は鏡でしか見ることが出来ない。あえて屁理屈を述べるのならば、写真や、ビデオでだって見ることが出来る。
「母さん。ちょっと散歩してくる」
　努はずっと育ってきた部屋の中で、パソコンでゲームをして、少し疲れたから散歩に行くことを家にいる日は繰り返しているなどと口が裂けても言えなかった。母には部屋では仕事をしているから入るときはノックをしてくれと言ってあり、ノックされたらパソコンのモニターの電源をＯＦＦにし、考え込んでいる演技をした。この

演技には慣れてきたもので、考え込む役柄を必要としている劇団からオファーがくるのではないかと思うほどだった。そうなれば、努の無職という肩書きもはずれるわけだが・・・。

努が散歩するといったら例の事件のあった土手だ。今日は気分で、土手の下に降り、川の流れを眺めることとした。ちょうど昨日、空き缶を蹴飛ばした時間帯と同じくらい。川の水には綺麗に星空半分、夕日半分の景色が映っていた。しばらく眺めていると、なにか光るものが落ちていた。

2．光と煙

「ん？」

努は子どものように好奇心が旺盛なため、川の冷たい水に手を突っ込みそれを手に取ってみた。努は手の先が凍りつくかと思った。でも好奇心のほうが数億倍勝っていた。努は冷たい水から解放されたとき、その手にさっきの光るものを持っていた。その正体はランプだった。どこかのアラビアの物語に出てくるかもしれないランプだった。そのランプは以前はそこになかったに違いなかった。なぜならそこは努がよく覗き込む場所だったからだった。でも、努は「こんなところに誰がランプを捨てたんだ？」くらいにしか思わなかった。少し光っているのは気になっていたが、この夕暮れの光の関係だと納得し、再びそのランプを水の中に戻し、（正確に言えば投げ捨てて）再び散歩に戻り、あたりが暗くなったころに、空腹に襲われたので、家へと歩を進めた。

そのときだった。何か川のほうで大きく光るのが見え、そして煙がもくもくと立ちこめた。努はそれが気になった。そして、ふとあのランプのことを思い出した。だが、すぐに光も煙もなくなり、もとの静かな夜の始まりとなっていた。「何かの気のせいだ。ちょっとゲームをやりすぎたか・・・」と、いったんランプのことを忘れることにして、家へと向かった。

「あら、おかえり。晩御飯出来てるわよ。最近なんだか忙しいみたいだけど、休憩しながらがんばってね」

そういう風に母は努に励ましの言葉を送った。

「お兄ちゃん、なんかすごいね」

妹もそれに続いた。ニコニコとしていた。それでも努は動揺する様子もなければ、ちっとも悪びれる様子もなかった。心の中ではどう思っているのだろうか？

努は晩御飯をかきこんで2階の自分の部屋へと急いだ。なんのためか?それは、とにかく母や妹としゃべっているのが面倒だったからだった。それに、父親には会いたくなかったと言うこともあった。父親の仕事は普通のサラリーマンで、努のベンチャービジネスをいいようには思っていなかった。それには複雑な事情があった。父親は有名大学を卒業後、新しいことに挑戦している企業、いわゆるベンチャー企業に就職した。その当時のことは他に話そうとしなのでよくわからないが、入社に関しては相当の反対があったらしい。ただ、兄がすでにベンチャー企業を立ち上げていたことを理由に父は反対を押し切った。その兄も実は起業するときには反対を受けていたらしいのだが・・・。父が就職したベンチャー企業は急成長を遂げた。ありえないほど成長し、東証一部にも上場するくらいになった。だが、それは長くは続かなかった。その企業ができてから5年。そのとき父が就職してから2年のことだったのだが、脱税が発覚し株価が急落。その後、企業は窮地に追い込まれていった。自業自得と言えば自業自得なのだが・・・。父はその状況の中、立て直そうと努力したが、その努力も空しく、企業はつぶれた。父は路頭に迷った。幸い、まだ若かったため、他に就職口が見つかり、安定した給与を得た。以前よりはかなり少なかったが、安定していた。その安定が何よりも大切だと思った。そんな過去があるから努のベンチャービジネスが認められなかったのだった。あのときの辛さを努には味合わせたくないというせめてもの親心だったのだが、努にはそれが通じなかった。というより本当はベンチャービジネス以前の問題であったのだが・・・。そうかといって努はそれを改め、ちゃんとした仕事に就こうとはしなかった。それは何か理由があるのではと思うほどであった。

次の日、努はいったんは忘れたはずのランプのことがどうしても気になり、昨日のランプを見つけた場所へとやってきた。しかし、そこにあるのはきれいに流れる透明の冷たい水だけでランプはなか

った。しかし、そのランプの落ちていたあたりに努のものではない足跡を見つけた。

「誰かが持っていったんだ」

努はそう思うことくらしかできず、その場を離れ家へと向かった。

この日の昼は特に何事もなく過ごした。

そして、その日の夕方のことであった。散歩コースをいつものと変更して、近くの山のふもとを通るコースにした。ごくたまに、このコースでも散歩をしていたことからそこまでの非日常的ではなかったが、いつものコースが気に入っていたことを考えるとそこそこ非日常的なことであった。だが、それは努の気分が決めることであって、誰かがこのコースにしろと決めるわけではないから、日常的だの、非日常的だのといわれる筋合いはなかった。

散歩も折り返しの山のふもとに差し掛かったときだった。登山口のほうになぜだろうか、ふと目をやった。そこは、きれいに整備された木の階段があり、それを包み込むようにきれいに整った木、草花が生い茂っていて、登山者には、これから登山をするのかとすがすがしい気分にさせるような場所であった。努はその光景が久しぶりで、どこか懐かしい気がしたため、その木の階段の地面から数段上ったところに腰をおろし、静かに山の音を聞こうとした。そのとき、なにやら右のほうで光るものが見えた。努はもしやと思った。昨日のランプのことが脳裏を急激な速さで駆け巡ったのである。案の定、草を掻き分けて見つけたのはおそらく昨日、川で拾ったランプであった。努は2回も同じランプを見つけたことから、このランプと何らかの縁があるとしか思えなかった。そして、それを散歩の土産として自宅へ持ち帰ることとした。

自宅へ帰るといつものように母の暖かい言葉と晩御飯が待っていた。いつものように努は目の前の食事をさっと終えると、部屋に戻

り土産のランプとじっくりとにらめっこすることにした。どこか古びていて、汚れていたり、傷がついていたりはするのだが、まばゆい光を放っていて、きれいであった。ランプはこすったり、磨いたりするとなにか起こるのが物語りの世界における常識である。努はそんなことはあるまいとは思いながらも、手元にあったハンカチで磨いてみた。すると不思議なことに昨日、川のそばで見たのと同じであろう煙が部屋中に立ちこめた。その煙の色は昨日は薄暗く灰色だと思っていたが、黄色みのかかった白の煙だった。

「なんだこれは。変なおもちゃを拾ってきたもんだ・・・」

煙が少しおさまると、机の上に現れたのは高さ４０センチくらいの小さな生き物、小人とでもいうべき生き物だった。努は何の心構えもなかったので、開いた口がふさがらなかった。そしてお決まりのようにほっぺたをつねってみたりもした。痛かった。

「こんなことで夢かどうかがわかるものか・・・」

そして、気を取り直してこの小人を観察した。青のチョッキにだぶだぶの紺のズボン、長靴のような赤い靴を履いていて、頭には緑の三角帽子がちょこんと乗っかっていた。その小人は努に向かって一礼をしてお決まりの文句を言った。

「私めをお呼びでしょうか？」

なんと口を利いたのであった。

「何のいたずらだ？」

小人は少し困ったような顔をしながら答えた。

「いたずらなのはそちらではありませんか？用事もないのに・・・」

「俺はランプを磨いた、って言うのか？」

「ええ。そうです」

「じゃあ用事ってたとえばどんなものなんだ？」

努は気づいたときにはすでにその小人と会話を成立させていた。まず、いろいろな状況が飲み込めない混乱状態に陥っていたことは言うまでもないだろう。だが、人間、混乱状況に陥るとその状況に順応してしまうのであろう・・・。そして、しばらく間を置いて、

小人は努の質問に答え始めた。
「あなた様は、このランプを磨きなさった。そして私めがここに参上しました。そしたらあなたはひとつお願い事をおっしゃれるのです」
「嘘だろう」
「私めは嘘は申しません。決して」
「それじゃあその　お願い事　ってのはなんでもいいのか？」
「いくらか応えられないものはございますが、基本的にはなんでも構いません」
「何でもいいんだな？」
「ええ」
「本当に何でもいいんだな？」
「ええ」
「何でも、何でも、何でもいいんだな」
「ええ、かしこまりました」
なぜか小人は何度もしつこく尋ねる努の言葉を聞き、そう言い、消えた。そして、努はおそらく空になったであろうランプとただ、そこにいるだけであった。
「なんだやっぱり夢か」
小人が目の前から消えたのは夢から覚めたためであると考えていた。そして、そのランプを明日どこに捨てておこうかと考えをめぐらせていたとき、さっきの煙が少しだけ立ち込めてさっきの小人が現れた。
「お待たせいたしました」
そう言って、再び煙が部屋いっぱいに立ち込め、ランプへとその煙が吸い寄せられていった。全部の煙がランプに吸い寄せられたかと思うと、そのランプは一筋の光と化して少しだけ開けていた窓の隙間から飛び出していった。努はその光を追いかけるかのように窓から身を乗り出したが、その光は西の方角へと消えていった。そのときに、夜であたりは暗かったのであるが、すぐ家の下に誰かいる

のがわかった。だが、それほど不思議なことではないのでそれは無視して、さっき起きたことを頭の中で整理しようとしていた。そして、部屋のほうに向き直ると机の上に皿に乗った白い塊があった。

3．突然の訪問と妙な落ち着き

「なんだこれは？」

努はこれがいつの間に出現したのかすぐにピンときた。

「あの小人だ！」

そこで努はなぜ小人がこの白い物体、おそらく食べ物であろうが、これを置いていったのか考えを巡らせることにした。努は自分がほとんど何も言っていないことに気づいたが、その何も言っていない中でもいった言葉を徐々に頭の中に浮かべては考えを巡らせた。

「なんで・・・あっ」

努ははっとした。小人はなんでも願い事をかなえてくれると言った。それに対して努は「なんでも」とたずねた。それが驚いていたがために、何度も何度も「なんでも」と聞いていた。「なんでも」「なんでも」「ナン」。そういうことだった。インドのパンのようなナンという白い物体を持ってきたのであった。ただの駄洒落好きな小人か、と、ことを終わらせることはできなかった。努は、あのランプさえあれば何でもできることが瞬時にわかった。それから、あのランプはどこかへ飛んで行った。つまり、川の中で発見したように、どこか他の場所へと飛んでいったのだ。こんな部屋でずっと遊んでいるよりはあのランプを探しに行ったほうが利口ではないかと努は思った。

努はパソコンの前に座り、ランプについての情報を集めることとした。だが、探せど探せどその情報は見つからなかった。努の探し方が悪かったのではない。努には情報を検索する自信があった。努はこの情報がごみの山のようにあふれているインターネットの世界を自由に動き回ることが出来、目的地にいち早くたどり着くことが出来た。それでも見つからなかったのであるから本当にその情報はないのであろう・・・。

そして、情報を検索するのに疲れた後、あることを思い出した。

努が小さなころの記憶から救い上げたことであった。それは、努の家の隣にいる変な考古学マニアの老人だった。まだ生きているのかどうかわからないがそのじいさんなら何か知ってるのではないかという気がした。というよりはその人くらいしか頼れそうな人がいなかったのであるが・・・。

ただ、その老人は昔から変人呼ばわりされていた。いや、実際変人ではあったのだが・・・。そのことから子どもの間だけでなく、親の間においても「あの人とは付き合ってはいけない」という共通の認識が冬から春になったときの草の芽ほど元気よく根付いていた。そのこともあり、その老人のことをよく知る人はほとんどいないだろう。努はそのじいさんと接しているのは回覧板を持っていくときくらいであった。数少ない接触の多い人間であろう。

回覧板を持っていくのはいつも努の仕事だったが、騙し続けている母親に対する申し訳なさからそうするのであった。他にも朝のごみ捨て、風呂掃除など努の出来る精一杯のことはやれるときは率先してやっていた。

そんなことは今回のランプの件とは全く関係がない。

努は次の朝、隣の老人を訪ねることにした。ただ、ちゃんと話を聴いてくれるかどうかは定かではないし、もちろんランプについて知っているかどうかも定かではないのだ。それでも努は、こうすると決めたら猪突猛進である。

努はいつもにもまして短い静かな夜を過ごした。大抵はヘッドフォンで音楽を聴きながらオンラインゲームなどをやっているのである。だが、昨日はそんな気にもなれず、早々とベッドのふかふかの布団にもぐりこんだのである。そろそろ寒くなってきた季節であるので、布団は欠かせなかった。

努は朝はピーマンの次に苦手だった。しかし、今日はどうだろうか。目覚まし時計よりも早起きし、目覚まし時計が鳴り出すのをカ

ウントダウンして待ち受けることが出来た。

しかし、朝早く起きる必要もなかったのである。一応、努もひとりの大人であるからして、こんな朝早く（午前7時）から他人の家に押し寄せるのはマナー違反であることは知っている。ただ、この朝7時という時間が世間にとって朝早すぎる時間かどうかは疑問であったが、努にとってはいつもの3時間は早かった。

部屋の中で落ち着かず、パソコンの電源を入れたものの、画面は何かのロゴが瞬間移動して現れては消え、現れては消えを繰り返している状態で、＞作業＜をしている状態では到底なかった。そのパソコンがロゴを瞬間移動させるように、努は時間軸を瞬間移動したいと思った。

（こんなことならいつもの時間まで寝てりゃよかった）

などと思ったときにはすでに遅く、布団にもう一度入ったところで胸騒ぎがして眠れなかった。こんなことは遠足を控えている子どものようだと世間では例えられる。遠足に行きたくなくって朝起きるのが憂鬱な子どもだっているだろうに・・・。しかし、世間はそんな例外は無視する。

何とか時間をやりすごした努は隣の家へと出かけることにした。午前１１時のことであった。

時間というのは不公平で、どうでもいいときは長く、楽しいときなどはすぐに過ぎてしまう。そういうことは、今は楽しくないのだろうか？いや、そうではないだろう。だとするとこの定義は間違っている。

努はまさに変人が住んでいそうな家の門の前に立った。といっても自宅から数メートルのところにあるのだが・・・。家は洋風で、木造２階建て。窓はガムテープで補強されているものなどもあるが、

かなりの数ある。誰が掃除するのかと思ったが、その考えは必要なかった。家全体が泥遊びをした後のような状態であった。

門のところにはインターフォンはおろか、表札すらなかった。郵便受けは、門を入って1メートルほどのところに立っている。これが微妙にまっすぐ立っていない状態で、色は茶色。注意してみないと郵便受けには見えないであろう。ただ、努は郵便配達の人がこの家の前にとまっているのを見たことがない。新聞も。

努がこの家に、いつも回覧板を持ってきたときは、直接、老人に手渡すか、ドアの前に置いた。しかし、後者のほうが前者よりも何倍も多かった。

庭は努の家よりも広い。というよりはそもそも敷地が広いのである。考古学の研究というのは儲かるのであろうか?穴を掘って何かを見つけ出す。そんなこと子どもでも出来そうだと努は思う。そんなことを仕事にはしたくない、と否定し、そんなことを繰り返したために今に至っている。

庭の中を見渡すとすでに土やらゴミでいっぱいになってしまった(おそらくは)池が寂しげに、しかし、にぎやかに居座っていた。木々、雑草は荒れ放題。こんなところに人が住んでいるのであろうかと思うくらいであった。

(あのじいさんはもうこの世の人ではないのであろうか?)

あれほど早く行きたいと思っていた隣の老人のところ。門の前で何分も立ち止まっているのは気のせいだろうか?

しばらくして、努は前へ一歩、一歩、そして一歩、また一歩、と歩みを進めた。そして、ついに荒れ放題の庭をやり過ごし、体中がなんとなくかゆくなったところで、玄関と思しきところへたどり着いた。しかし、インターホンはない。ただ、安心したことにドアはそこに存在し、家の中と外をしっかりと区切っていた。

努は、そのドアをノックした。が、・・・、音が出ない。その木

のドアは湿っていて、普通ならなるはずの、コンコンッ、という軽やかな音を奏でなかった。そんなことはいまさら確認するまでもなかったのであるが・・・。しかし、このときに、そんな冷静に物事を判断するだけの余裕を努は持ち合わせていなかった。

努は困惑した。そして、湿った木を触ったことが気に入らなかった。そのままあきらめて帰ってやろうかと思った。ランプのことなど最初から知らなかったとすれば問題ないのであるから・・・。

そして、U一ターンして、また荒れ放題のプチジャングルを通らないといけないのかと落胆した。覚悟を決めるまで数分を要した。すると、後方から音声が聞こえてきた。

「何か御用ですか?」

それは明らかに努に対するものであった。努はその音声にすぐに反応することが出来なかった。それは、数歩、プチジャングルに足を踏み入れていたからであった。やっとのことで足の踏み場を確かめ、振り向くことが出来たときにはそこに予想外の人物が立っていた。例の老人ではなかった。そして、その老人の婦人らしき人でもなかった。

その老人が結婚しているかどうかはわからなかったが、明らかにさっきの音声は若かった。それを考えるとそれほど驚くことではなかろう。そこに立っているのは二十歳前後の女性であるのだから・・・。いや、そういう問題ではないことは言うまでもない。

「あの、お隣の方ですよね?何か御用ですか?」

なぜかその女性は努のことを知っていた。お世辞にも美人とは言えないのではあるが、ルックスは普通よりは上であろう。(努の主観的ランク付けではあるが・・・)

何か用かと聞かれても困るのは言うまでもなかろう。こんな女性ではなく、老人に用があるのだ。

その女性は、努がなにも答えずにじっとこっちを見ているのでちょっと気恥ずかしくも思ったりしたのだろうか、当惑しているようだった。

「あの・・・」

これ以上は限界であった。努は、ついに覚悟を決め、本題を切り出した。この決断は歴史上の大きな決断と比べても劣らないくらいのものであろう。その歴史上の大きな決断が何であるかというのは、すぐに思いつかない努ではあった・・・。

「こちらにおじいさんいませんでしたっけ?」

全く変な質問を唐突に投げかけているのは地球が太陽の周りを回っていることのように明らかなことであり、確かなことである。

すると意外なことに女性は少し微笑んで、

「祖父のことですね。しばらくお待ちください」

と言って、ドアを閉めていったん中へ入ったが、すぐに戻ってきた。

「おかしいですね。さっきまで書斎にいたのに・・・」

と、努に間接的に老人が不在であることを伝えた。努は「そうですか、出直します」と言って、またプチジャングルのほうへと体を向けた。しかし、今度はそのプチジャングルに入場する前に目的の人物が門のところへやってくるのを確認した。子どもの頃のかすかな記憶、回覧板を直接手渡ししたときのチラッと見えたときの記憶。それらの記憶を確かめると、この人物で間違いはなかった。

その老人は、努のほうを見て、きょとんとしていた。いや、老人にきょとんとと言う表現は似つかわしくないだろう。改め、老人は目の前でいきなり手をたたかれたかのような顔をしていた。

努は、前にも後ろにも行けなかった。前に老人、後ろに女性。プチジャングルを忘れてはいけないが・・・。そして、状況を打開す

るべく、言葉を発した。
「こんにちは。隣のものです」
老人はなおも同じ顔をしていたが、ゆっくりとプチジャングルに分け入り、慣れたようにすいすいと努の前にやってきた。また回覧板を持ってきたとでも思っているのだろうか？
「私に用ですか？」
おっとりとしたその声には深みがあり、包容力があった。
「少しお伺いしたいことがございまして」
「そうですか。構いませんよ、暇をもてあましている毎日ですから、よくわからない客人と時を過ごすのも悪くないでしょう」
声とは裏腹にその老人は失礼なことを言うものである。いや、正しいことであるが・・・。
その老人はこの家に住んでいる人だとは思えないくらい服装はしっかりとしていたし、足取りもしっかりとしていた。背筋もピンとまでは伸びていないが、それほども曲がってはいなかった。
努は、オンボロ屋敷のなかに通され、応接室らしきところへと通された。
「そこのソファに座っててください。すぐに戻りますので」
老人はそう言って、屋敷の中へと消えていった。努はこの屋敷の中を探検してみたくなったのではあるが、この応接室にも見ごたえのあるところはタップリであった。
１０畳ほどのフローリング（と呼べるかどうかは怪しいが・・・）の部屋で、ソファが４つ。色はネイビーブルー。その４つのソファは木製のテーブルを囲っていた。ここだと麻雀も出来そうだ。他には、大きなショーケースのようなものが置いてあり、そこには考古学で入手したものであろうか、それっぽいものが並んでいる。もちろん価値など努にはわからないのであるが・・・。努が一番よく価

値を知っているのはコンピュータであった。暇があればコンピュータの性能別、メーカ別の相場を調べていたりする。最近は価格がオープン価格となって、定価というものが実質存在しないに等しいこととなって（とはいえ、暗黙の了解でメーカは定価なるものを定めているのであろうが・・・）相場を調べるのが一種の考古学のようであった。

さらに部屋を見渡すと、戸棚があり、棚の中には本が並んでいて、ガラスの戸の中にはグラスや食器が並んでいた。しかし、どれもこれも長らく使われていないのであろう（いや、一度も使われていないのではなかろうか・・・）ホコリが積もっているのが少し離れたところからでも確認できる。

さて、応接室の観察はそんなところだ。

しばらくして、老人が戻ってきた。

「よくお越しくださいました」

と努に話しかけた。

「いえいえ、勝手に押しかけてしまって申し訳ないです」

「構わないんですよ。暇なのですから。隣の槍本さんでしょう？」

「ええ、そうです」

老人はしばらく努を嘗め回すようにじろじろと全身を見た。不思議な空気が流れた。この老人はどこの誰が来たかだけは気になるのだが、何の用事で来たのかは気にならないのであろうか？

トントン

と、少し鈍い音をドアが奏でた。そして、きぃーっという音と供にさっきの女性が現れた。

「コーヒーでよかったですか？」

「ああ、申し訳ないです」

「気になさらないでください」

そう言って女性は音を奏でる扉を後ろ手に閉めて、すぐ近くのソファの近くにしゃがんでコーヒーを3つ並べ始めた。3つということはこの女性も話に参加するようである。努にしては少し計算違いではあるのだが・・・。

しばらく3人は黙ってコーヒーをのどに流していた。そのコーヒーは普通以上の美味しさではあったが、たまげるほどでもなかった。努は別にコーヒーに関して詳しいわけでもなかったので、素人目でなんとなくそのことがわかったくらいであったが、それがまずいとは思わなかったし、むしろ美味しいと思った。普段からインスタントコーヒーばかりの努には格別の味であった。そのことからこれはインスタントコーヒーでないと推測されるが、おそらくはこの女性だけが知ることであろう。

「それでどういったご用件で？いきなりの質問で申し訳ないですが・・・」

と、老人は言った。努の突然の訪問のほうがよっぽど失礼であるし、迷惑であろうが、この老人は、その努を大切な客人として扱い、気を遣ってあれこれと様子を伺っていたのだった。

「ええ、本当につまらないことなのですが・・・」

「つまらないことですか？」

そう言って努はハッとした。つまらないことと言ったらそのままの意味に取られて、どうでもいいことを話しに来たのかと勘違いされるかもしれないと思ったからであった。しかし、ここは日本語のいいところが適用されることになる。たとえば、手土産を持っていって「つまらないものですが・・・」と言うようなものである。厳密にはこの場合はそれではないのだが・・・。

「不思議なことが昨日、ありまして・・・」

「ほう、ほう」

老人は、わけのわからない話をしどろもどろに始めた努に耳を傾

けて、相手の言いたいことを必死に理解しようとしていた。最高の聞き手であった。

「その不思議なこととは？」

老人のほうから食いついていき、努に話しやすい展開に持っていった。最高の聞き手である。

「昨日、いや、正確には一昨日のことなのですが」

「はい」

老人はテンポよく頷いてみせた。最高の聞き手だ。

「近くの川で光るものを見つけたのです」

努の話は抽象的で、もったいぶった言い方だった。友人に対してこの話をするならまだしも、近所の老人に相談を兼ねている話なのだから、このようなもったいぶったカタツムリが這うような話の進め方はよろしくない。

しかし、老人はいやな顔一つせずになおも頷いてみせる。時々コーヒーに手を伸ばしながら・・・。そのうちに老人のコーヒーがなくなったので、ポットから女性によって新たに老人のカップにコーヒーが注がれた。努は話をしているせいか、カップにまだコーヒーはあったが、女性はついでに努のほうにもコーヒーを入れた。

「その光るものを拾ってみると、ランプだったのですよ」

（だからどうしたというのだ？）

これが老人の率直な感想であろう。そして、それが普通の反応だろう。金属で出来たランプというゴミを拾っただけではないか、と。ただ、それは普通の人間においてしか当てはまらない。

この老人は、一瞬ドキッとしたような表情を見せたが、平静を保とうとしていた。努は、この少しの変化を見逃さなかった。

（このじいさん、何か知っている・・・）

「ですがね、それはやっぱりゴミだと思ったんですよ。それでその日はそのまま元の場所に戻したのです（正確には投げ捨てた・・・）

」
「そうですか。それでそのランプはまだそこに？」
初めて老人は頷き以外の大きな反応を見せた。努に対して質問を投げかけたのであった。いや、ひょっとしたらそろそろ嫌気がさしてきて、さっさと話を終えたいだけなのかもしれないと、ほんの少しだけ思ったのであったが、ランプと聞いたときのあの変化を見る限りはそうだとは思えなかった。むしろ、このランプの重要性を知っていると。そう、魔法のランプだと。
「いえ、なんとなく気になったので、翌日同じ場所に拾いに行ったのです」
「で、なくなっていたと？」
「はい、そうです」
「話はそれで終わりですか？」
老人は少し焦っているようにも見えたが、必死に平静を保とうとしているようにも見えた。
「いえ、その後、散歩をしていると、近くの山に差し掛かったのですが、そのふもとの木々、草花が生い茂るところに光を見つけたのです」
老人はその言葉を聞き、息を呑んだ。そして、質問を続けた。
「それで、またランプはそのままに？」
「今度は持ち帰りました」
「何か不思議なことはありましたか？そのランプに」
（この老人、確実に何かを知っている）
「ここから信じられないことかもしれませんが、話してもよろしいでしょうか？」
「ここで話さないなんて言わせませんよ」
老人はぎこちなく笑ってみせた。その声に強さはなかったが、優しさもなかった。
「ええ、もちろんです。それを話すためにここに来たのですから」
「それはよかった。お聞かせください」

「そのランプをハンカチで磨いてみたのです」
「なぜです?」
なぜと言われても、人間は時に理由なく動くことだってある。それに強い口調で「なぜです?」と聞いてくるのであるから、きっと何かあるのである。
「物語などでよくあるではないですか、ランプをこすったらランプの精が出てきて願い事を叶えてくれると」
「わかります。それで、ランプを磨いて何か変化が起きましたか?」
「驚きました。部屋一面に煙が立ち込めたのです。そして、その煙が消えたときに、自分の机の上に小人がいるのを目にしたのです。今考えると夢のようですが・・・。いや、実際に夢だったのかもしれません」
「で、それがランプの精だったと?あなたの願い事を叶えてくれたと?そういうことですか?」
いや、この老人はただ、話好き、空想好きなだけで、このランプについては実際知らないのではないかと努はこの時点で初めて疑った。しかし、後で、この考えは全くの間違いであることに気づくのであった。
「その通りです」
「で、なんと願いをしたのですか?」
「それが・・・」
「それが?」
不思議な空気が流れ、不思議な間が空いて、老人の不思議そうな顔が努の目に映った。
「特になんとも願いを叶えていないのですが、ナンというインドのパンのようなものを持ってきてくれました」
「・・・」
老人は何も言わなかったが、なんとなく笑いをこらえているように見えた。
「そのときに小人と何か会話をしていませんでしたか?」

「自分もそこに原因があったと思っているのですよ」
努は夢のような話をまじめに話している自分が恥ずかしかったが、目の前でその話を真剣に聞いている老人のほうがもっと恥ずかしいであろうと思う。ただ、そこで、努は一つ重大な事実に気がついてしまうのだった。全く発言はしていないものの、そこにはもう1人いたということを・・・。しかし、ここまでくればそんなことお構いなしであった。
「自分は小人に、小人が何をしにここに現れたのかなどいろいろ質問をしたのです」
「ほう」
「それで、最終的に何でも願いを叶えると言ったのです」
「小人が・・・」
努は付け加えた。
「そして、自分はその“何でも”と言う単語を驚きのあまり繰り返しすぎたのです」
「それで　ナン　ですか」
「それくらいしか考え付きませんよ」
「ダジャレ好きな小人さんだったのですね」
「そのようです。それで、考古学に詳しいと評判のあなたでしたら何かこのランプのこと、小人のことについてご存知ではないかと思って伺わせていただいたのですが・・・」
「ちょっと待ってください。まだ話は最後まで終わっていませんよ。その小人が　ナン　を持ってきた後、小人、ランプはどうなったのです？」
「小人は煙と供にランプの中に吸い込まれていき、光になってどこかへ飛んでいってしまったのです」
「なるほど。つまり、ランプはまたどこかへと飛んでいき、次の拾い主を待っているということですね？」
「自分はそう考えています」
しばらく老人は考えるそぶりを見せた。本当に考えているかもし

れないのだが・・・。

努はさっきの質問に答えてもらっていないことに気づいた。

「それで、このランプについてなにかご存じないですか？」

なんとなくであるが、この老人はランプについて何か知っているのではあるが、それに関してあまりなにも話をしたくないのではないかと努は思った。

「私は嘘はつきたくない」

「ということはどういうことです？」

努は攻めた。このチャンスになにかを聞き出しておかなければ一生このランプについて知ることはないだろう。

「しばらく時間をくれませんか？」

老人が初めて、会話のテンポを乱す提案をしてきた。それを努は快く受け入れ、右手でどうぞ、という意思を表した。そして、老人は努に待っているように言い、部屋を後にした。それに続いて、女性が努に「ごゆっくり」と言って、タイミング悪く部屋を後にした。

（あのじいさんは、絶対に何かを知っている。でも、何か事情があって言えないことなのか、それとも言いたくない、思い出したくないことなのか・・・）

4．苦悩と決断

2、30分がたったであろうか?努は、ここに来ることだけに一生懸命になっていたために時計や携帯電話を家から持ち出してくるのを忘れてきていた。そして、部屋の中に時計はなかったのであった。

部屋の壁をじっと見つめているのに飽きてきた頃、老人が少し膨らんだ普通の封筒を持って現れた。

「2、3、質問をさせてください」

「ええ、構いませんよ」

努はさらりと答えた。

「お歳は?」

「27」

努は数字だけ答えた。

「職業は?」

と聞かれて、努は一瞬困った顔になった。ここで、本当のことを言う、つまり無職だと。そう答えるとどうなのか?この話が噂になって・・・というのは考えすぎであろうが、あまりいい印象をもたれないに違いない。ましてや、今となってはお化け屋敷と化しているが、昔はかなり立派だったらしいお屋敷に住んでいる老人に対して、無職ですなどと答えられるはずもない。そんな思考が努の頭の中を駆け巡った。

よくある話であるが、努の中で天使と悪魔が戦っていた。

努は、無職ではあるが、母親思いであり、決して罪に手を染めたりするわけではなかった。大学中退だって、大学が面倒になったとか、勉強が嫌になったとかではなかった。ただ、その理由を努は誰にも話そうとはしなかった。数少ない友達、家族にすら・・・。

「ちょっと訳あって今は・・・」

「無職ですか?」

今ごろではあったが、努は老人に敬語（丁寧語）で話をされていることに違和感を覚え始めた。
「単刀直入に言うと・・・」
「そうですか・・・」
老人は少しがっかりしたような様子で、下を向いた。しかし、その顔には何か決心したような、そんな感じであった。
そして、老人は、手元に持っていた封筒をそっと努に差し出し、しっかりとした口調で語り始めた。
「これをどうぞ」
努は受け取った瞬間、ずしりと重みを感じた。
「少ないですが、その中に５０万入っています」
努は、その言葉を聞いて封筒から手を離した。当然のことながら５０万の札束を含んだ封筒は重力により、床に向かって行った。そして、どさっという音と供に封筒から福沢諭吉が顔を覗かせた。
努は、メデューサの亡霊に直面したかのように石になった。冷たく、ピクリとも動かない様子で・・・。

老人は、その封筒を拾おうとはしなかったが、しばらくの無音の時間の後、口を開いた。その声はどこか震えていた。
「今回、あなたが目にしたこと、体験したこと、それをすべて忘れていただけませんか？」
「ど、ど、どういうことです？」
「これ以上はあなたにお話できません」
努は、普通ならこの５０万の口止め料をもらってこのことを地下層処分にしただろう。しかし、努にはわかっていた。あのランプの有効利用法が。
「それは自分が無職だからと言うことですか？」
「そのことで気分を害されたのなら申し訳ありません。しかし・・・」
老人は言葉を詰まらせた。

目の前の５０枚のユキチ。どこかにあるランプ。それのどちらを取るのか、という選択を努は頭の中で行っていた。
さっきの悪魔と天使の戦いで、天使が勝ってしまったことを多少後悔した。なぜなら、あのときに無職と言わなければ、ランプに関する情報が得られたに違いなかったからであった。

老人はおもむろに立ち上がり、ユキチの封筒を拾い上げ、努の前のソファに座りなおした。そして、何か思いにふけるように天井を見上げ、ぼそぼそとつぶやき始めた。何かに悩んでいる様子はひしひしと伝わった。
「私はもう歳だ・・・。この人は隣の槍本さんの息子さん・・・。彼の父親は、会社員・・・。真面目そうだ・・・。」
果たしてこれは努を目の前にして言うべきことだったのか・・・。

「それでは私から提案があります」
「何です？」
「あ、その前に質問を一つ」
「はい」
「もし、私がここで帰ってくださいといえばあなたはどうしますか？正直にお答えください」
そんなことはランプ関連のことに決まっていた。今度は頭の中で計算を始めた。
（ここで、ランプについて調べる、ランプを探しに行くと言えばどうだろうか？老人はユキチの封筒をよこして、やめろというだろうか。
ランプのことをすっきり忘れて、そんな金ももらわずに帰ると言えばどうだろうか？はいそうですか、と帰してくれるだろうか。
しかし、それのどっちも求めていない。ランプのことが知りたいのだ）

「ランプを探しに行きます。おそらくはこの地球上のどこかにあるのでしょう？日本にあることだって考えられますし」

努は、別に後半部分は言う必要はなかったのではないかと後になって思った。

それを聞いた老人は、すっと立ち上がって、努の横辺りに座った。正座で。そして、そのまま頭を下げた。

努は正直、焦った。いや、誰でもこのシチュエーションに遭遇すると焦るであろうと考えることによって努は冷静さを保ち、老人に対して、やめるように言った。まだ何も言っていないにもかかわらず。

しかし、努の制止もむなしく、老人は今までの優しい声はどこに言ったのかと思うくらいおびえたような声で、そして、強くなにかを求めるような声、大きな声で話し始めた。

「どうか、ランプを見つけ出し、私のところまで持ってきてはいただけないでしょうか？ただとは申しません。それも今回のような金額で片付けようなんぞこれっぽちも考えておりません。老い先短い私でありますが、ここで最後の一生のお願いといやらを使わせていただけないでしょうか？」

努は急いで、老人の前に正座し、老人に頭を上げるように言った。

「それでは、このじじいの一生の願いを聞いてくださるのですか？」

「今度はこちらから2、3、質問をさせていただけますか？」

「問題ありません」

「ランプを見つけてここに持ってくるということはランプの場所を教えていただけると言うことですね？」

「それは、この話を受けていただいたときにお話します。もちろん、ランプについてのことも多少は・・・」

「そのランプを見つけてここに持ってくるまでに自分はそのランプを何度か使って願いを叶えてもいいのですか？」

「それはやめてください。その代わりとして１００万、いや、２０

0万差し上げます。それでも少ないならばもっと・・・。どうせじじいに使い道はありませんから」

「あなたはそのランプを使ってどうなさるおつもりです？」

「それもこの話をお受けいただいてからです」

「しばらく考えさせてください」

「わかりました。それではコーヒーを持ってきましょう」

そう言って老人は立ち上がり、努にソファを勧めた。努は一礼し、ソファに腰掛けた。

（ランプのことについて知るためにはじいさんとこの契約をしなければならない。しかし、その契約をすることによって俺はランプに願いを唱えることが出来ない。ランプのことを知らなければランプがどこにあるかなどわからない。散歩コースにうまく落ちているとも限らないわけであるし・・・）

老人は、コーヒーを持って現れた。女性は遠くから「持っていくのに・・・」と言っているが、老人は「悪いが席を外しておいて欲しいんだ」と申し訳なさそうに言った。

ドアがきしんで老人が入ってきたところで、努はコーヒーがのったトレイを受け取り、テーブルの上に置いた。そして、老人がソファに座るのを待ってからソファに腰掛けた。

しばらく二人はコーヒーをのどに流すのに専念していた。努はもちろんのことであろうが、老人とて、そのコーヒーの味どころか、熱さもわからなかったであろう。

（このじいさんはこの歳になって人生最大の決断をしたのであろうか・・・。相当悩んでいる様子であったし・・・）

そして努は一大決心をした。

「わかりました。その話、条件付で受けましょう」
「条件というのは？」
老人が心配そうに尋ねた。
「その、報酬はいただけません」
「それじゃあ何が欲しいのですか？」
「なにも・・・。ですが、ランプを探すのに必要な費用はご支援願えますか？」
「もちろんですとも」
老人はうれしそうだった。一生の願いがかなった今、死んでもいいくらいだと思っているかのようにうれしそうだった。いや、ここで死んではランプを受け取れない・・・。

二人は安堵の表情でコーヒーの続きを飲んだ。そして、老人は孫娘にコーヒーポットにたっぷりコーヒーを入れてくるように頼んだ。

5．ランプの秘密とカード

「それではお聞かせ願えますか?ランプについて」

そろそろ外は日が少し傾きかけていた。昼過ぎであろう。努に特に用事はなかったので問題はなかったのであるが・・・。

「わかりました。あのランプは、おっしゃる通り、磨くことによって煙が生じ、小人が現れます。その小人はランプを磨いた人、つまり、ご主人様の願い事を一つだけ叶えてくれるというものです。そして、願い事を叶え終わると、再び煙が生じ、ランプへと吸い込まれ、ランプは光となってどこかへと飛んでいきます。そのどこかというのは、誰にもわからないのが事実なのですが、地球上で、地上であることは確かなのです。海の中や、空中には漂いません。これをどうやって見つけるのかについてですが、一つは、このランプの不思議な現象を利用するのです。1日に1回大きな光を空に向かって放ちます。それを偶然見つけることが出来ればいいのですが、昼間であったりすると、見えませんのであまり役に立たないとされています。そこで、ランプを探す研究者はランプのこの光を検知する機械を作成しました。違う光などにもたびたび反応してしまいますので、なかなか正確というわけには行きませんし、具体的な位置までも特定できるわけではありません。その気になる機械のことなのですが、シャインキャッチマシンという機能そのままの名前です。これは当初、このランプが悪用されないように回収し、ランプを保管することを目的としている機関向けに開発されたものでした。しかし、金に目がくらんだ研究者の1人がそれを持ち出し、外観をごっそりと変更し、量産し、各地のランプハンターへと高額で売りさばいたのです。それが高額で売れる理由は言うまでもないでしょうが、ランプが見つかればすぐに取り返せるからです。こうして、ランプはランプハンター誰の手に渡ってもおかしくない状況へとなりました。

さて、ここで、ランプはいつごろからあったのかと言うことに関して話をしたいと思います。このランプはおよそ３００年前に発見され、善良な人間によって１００年前に地下奥深くに封印されました。それが２０年ほどたったときの大規模な火山の噴火により地上へと戻されたという説が有力です。確かではありませんが・・・。」

黙って聞いていた努であったが、こらえきれずに口を開いた。

「なぜ?なぜ地下に封印するのです?それは確かに光などは地上に出てきたりしないのでわからないでしょうが、地殻変動などによって地上に出てきてしまうことは明らかでしょう?」

「ええ。それはそうです。しかし、ランプの願い事はランプに関することは出来ない決まりとなっているのです。つまり、ランプを無くして欲しい、だとか、ランプの次の場所が知りたいだとか・・・」

「だったら、ランプを壊すなり、溶かすなりすれば・・・」

「もちろん、試みています。しかし、無駄でした。そこで、またランプを回収し、地下にシェルターを作りそこに収めました。それを行ったのは私です。ちょうど今から５０年前のことです」

「ということは、あなたはそのランプを回収する機関の人間であったと?」

「いいえ、違います。ですが、後でその機関には報告しました。そして、機関の人間によりチェックされ、この様子だと大丈夫だろうということになりました。しかし、機関は監視のために活動を続けています」

老人は一気に話をしているので、一呼吸おく必要があった。

「それで、私はそのランプを回収し、再び封印しようと思うのです。先ほど機関にもランプが復活したことを伝えましたが、私なんかが気づく前に気づいていたでしょう・・・。今頃はランプ探しに出かけているはずです。

しかし、大人数でかかればランプハンターに見つかりかねません。

あのとき現役のランプハンターだった者は私のような老いぼれとなってしまっていますが、その子孫に継がせる可能性は否めません」

さらに老人は一呼吸おいた。

「人間の欲望は周りがどうなろうと気にならないくらい強いものであることをしっかりと覚えて置いてください」

すべてを言い尽くした老人はポケットからカードくらいの大きさのケースを取り出し、そのケースを開けた。中からは少し分厚いいくつかのメータが付いたカードが出てきた。

「これがシャインキャッチマシンのカード型です。これだと携帯に便利でしょう」

「本当にこんなものでわかるのですか？」

「ええ、この方位磁石みたいなものが付いているでしょう？」

二つのメモリと供に確かにそのようなものが確認できた。

「これが前回に光を確認したときの方位です。ずっとその方位を指し続けます。それから、このメータの一つは光までの水平方向の距離を表します。もう一つは鉛直方向の距離、つまり高度の差を現しています。これを参考に地図などで場所を割り出すのです。そうですね、明日の夕方にまたここへ来ていただけますか？そのときのメータなどを地図と照らし合わせてみましょう。ただ、違う光を感知する場合もありますからなんともいえませんが・・・」

努はソファを立とうとしたときに、老人はさっきの封筒を指して言った。

「これは明日の地図との照らし合わせの具合に応じてお渡しします。それなら受け取られるでしょう？」

努はわずかに頷いた。

6．光の誘惑と抑制

翌日の昼頃、ずっとカードを眺めていた努はメータが変化していることに気づいた。錯覚ではなく確かに変化していた。それは昨日のメータの状態をメモ帳に記録しておいたことから確かであった。老人は昨日の帰り際、思いついたように努にそのようにするようにと言ったのであった。それは、何日かのデータを見て、明らかに他と違うデータを除いたとき、残ったデータを見ればより特定しやすくなるからということであったが、なるほどと努は思っていた。それで、抵抗もなく自宅に帰ってすぐにメモに記録したのであった。そして、今回の変化においても同様にメモに記録した。

場所：自宅
水平距離：・・・・
鉛直距離：・・・・
方角：・・・・

夕方になり、そろそろ約束の頃であった。母に今日の仕事は終わったから気晴らしに散歩をしてくると伝えた。母は遅くなるようだったら連絡をしてくれと言ったので、努はそれに返事をして玄関を飛び出した。そのままの勢いで、隣の家へと行き、例のプチジャングルを抜け、扉の前に立った。すると、すぐに扉が開き、老人が努を迎えた。

「変化はありましたか？」

老人は挨拶のようにその言葉を発した。

「ええ、昼頃のことです。ちゃんとメモに取りました。それからは変化していないようですが・・・」

「そうですか、壊れていなくてよかった・・・」

ボソッとそう言った。

「それでは早速、ランプのありかを特定しましょう。さあ、どうぞ中へお入りください」
努は言われるがままに老人の後について、昨日の応接間に入った。

老人は少し大きな、そして、普通のものとは違う世界地図をテーブルの上に広げ、物差しやコンパス（方位磁石）などを取り出した。
「そうですね・・・、マシンのさしているところはイギリス、ロンドンの辺りですね」
「え、そんなところまで行くのですか？」
「やめますか？そうですね、家族のこともありますでしょうしね・・・」
「いえ、こういうことも覚悟の上に決めていたことなので、行きます。金銭面はどうにかしてくださるのでしょう？」
「もちろんです。ところで、英語は話せますか？」
「全く・・・」
「それでは通訳も用意しておきましょう。明日の朝一番に準備をしてこちらにいらしてください。空港までお送りいたします」
「そんなに都合よく飛行機の予約とれるのですか？」
「任せてください」

努は運よく、韓国に家族旅行に行ったときのパスポートの期限が残っていたため、すぐにロンドンに行くことが出来た。

そして、右も左もわからないロンドンに降り立ち、通訳と合流した。言うまでもないがロンドンは大都市であるため、努は、こんな街中にランプが落ちているとは思えなかった。だが、そんな考えはすぐに払拭されることになった。
街のあちこちに異国の人種があふれており、現地の人に何か聞き込みを行っているかのようであった。

（これがじいさんの言っていた機関の人間か？それとも、ランプハンターか？）

努は、国際電話であの老人にロンドンに着いて、そういう人々がいることを伝えた。すると老人は、その人たちに自分もランプを探しているということを明かしてはいけないと、強く言った。そして、マシンになにか大きな変化があったときにまた連絡するように言った。

（こんなところでどうやって探せと言うんだ？）

努は、イギリスに来てしまったことを後悔した。いずれまた、日本にもランプが来ることがあるのだろうから、そのときまで待っていてもよかったのではないかと思ったからであった。だが、そのころにはすでに何人かがあのランプを使ってしまったことになるが・・・。

努は、通訳と供にバスに乗った。老人は正確ではないかも知れないと言ったが、ここにあるのではないかという具体的な場所を示していた。

努は、バスに乗ってちょっとほっとしたとき、まだ外は明るいというのに急激な眠気に襲われた。その眠気にはとてもじゃないが勝てそうになかった。仕方がないので、通訳に着いたら起こしてもらうことにし、そのまま眠りに堕ちた。

グリニッジというところに到着した。努はここが本初子午線の通るところだとかつて習ったことを覚えていた。教科書で知ったところに来るというのも楽しいものであるが、今回はその観光にきたのではないことをすぐに思い出した。

努は、通訳と供に、何人かの警官に絡まれつつもあちこちを探した。また、同じような人々がここにもいた。努は、ランプがここにあることが確かではないのだが、なんとしてもこの人たちよりも先に見つけてやるという気になった。それは何の目的があったわけでもなく、ただの負けず嫌いであった。

努は、見晴らしのいいところから老人から借りた高性能な双眼鏡を片手に光るものを探していた。そのとき通訳はかなり暇そうであった。金がもらえるから一緒にいるだけで、ボランティアとしての通訳ならすぐに帰ると言っていたかも知れない。なんと言っても、ずっと通訳らしい仕事をするでもなく、依頼主のそばに立っているか、座っているかだけであったからであった。

ボーっと双眼鏡を眺めていると、ロンドンに行くと言ったときの家族の反応をふと思い出した。金の心配はないと付け加えたので家族は一つの不安は取り除かれたようであったが、その他の多くの不安に比べれば、ほんの一部にもならないものが取り除かれただけであった。

そろそろ休憩しようかと思っていたときだった。グリニッジ天文台でなにか光るものを見つけた。ひょっとしたら見ているうちに太陽の傾きが変わって何かの金属が光っているのかもしれなかったが、努にはなんとなくランプであるような気がした。こんなに簡単にランプが見つかってしまっていいものなのかと思ったくらいであった。とにかく、グリニッジ天文台へと向かった。

天文台の辺りにも聞き込みを行っていると思われる人々がいた。その人々の目をかいくぐり、ただの観光客を装って天文台の中へと入った。

なんと、そこにランプは落ちていた。まさかと思ったが、まさにそれのようであった。ほんの数日前に見たランプ。それがここ、ロンドンに落ちているのである。

さて、老人から受け取っていた飛行機のチケットにはまだ日があった。到着してから3日間は探すのにかかるだろうということから3日後のチケットであったのだ。そのため、努は、初めての単独海外旅行と称して、イギリスの観光を行うことにした。

7．勝てぬ欲求と暴走

3日後、無事にランプと供に飛行機に乗り込んだ。このランプはまばゆい光を放っているため、それなりのケースで密封しなければならなかったため、飛行機に乗るときに少し手間取った。

あっという間に、イギリスでのランプ探しの旅は終わってしまった。こんなに簡単に、あっけなく、苦労もなく、ランプを見つけてしまってよかったのだろうか?努にはこの後、何か良からぬことが起こりそうな気がしていた。だがしかし、よく考えれば、1回目にランプを見つけたときも、2回目にランプを見つけたときもなんで?と思うくらいあっさりと見つかっていた。それは、このランプを探している人間がそれほど多くないという事実からであろうか?そういうことは、時間が経つにつれてランプの存在を知る人間が増え、これを求める人間が増えるかもしれない。

努は、ロンドンに到着したときに電話をして以来、老人に電話をするのを忘れていた。なぜなら、観光に全力を注いでいたからであった。ロンドンに着いたときに、携帯電話のようなものを使って電話をしていたわけではなかったので、老人から努に電話をすることができなかった。老人は努の連絡をじっと待っていたであろう。そわそわしながら・・・。

空港からタクシーを拾い、自宅へと戻った。家族が暖かく出迎えてくれた。家族には仕事の出張で行くということにしてあった。多少は土産も必要だろうと思い、観光の合間をぬってそれらしいものをいくつか購入してきた。別に老人には必要ないだろうとあえて買っては来なかったが・・・。

普通なら、老人にすぐにランプが見つかったと電話をすべきだったし、家に帰ってきてすぐに老人にランプを持っていくべきだった。その普通に考えればできることがなぜかそのときの努には出来なかったのであった。

それは、あまりにもあっさりとランプが見つかったからだったのか？この理由は後になってなんとなくわかるのであった。

努は、疲れから、荷物を片付けた後、ランプの入ったケースを部屋の中に置き、昼前ではあったが、そのまま眠ってしまった。

夕方頃、はっと起きたとき、努は体中の震えが止まらなかった、そして腕は自然にランプの入ったケースへと伸びていく。抑えがたい感情。体が勝手に動くようにさえ思えた。しかし、頭はすっきりとしていて、冴えているともいえるような状態にあった。そして、今となっては自分の指揮下にない腕がどんどんとランプのケースへと伸びていき、止め具をはずす。その腕は震えていたし、体全体も震えていた。努はこれがなぜだかわからなかった。何かに操られているような、不気味な状態だった。

徐々にケースから光が漏れ、その光が努の体を一層刺激した。そして、震えながらもしっかりとケースのふたを取り払い、そのままランプへと手を伸ばした。

震えながら

ゆっくり

しかし、しっかりと・・・

ついにランプを手に取った。これから何をしようというのか、努

の体にしかわからなかった。努は今、体と、頭が別である。その頭のほうは薄々と感づいていた。これから自分が何をしようとしているのか、そして、体は何に支配されているのか。

そいつは、ここにきてようやく頭角を現したという感じであった。早ければロンドンにいるうちにこいつは出てきてもおかしくはなかったのだ。それを考えれば努はよく我慢したほうであった。ただ、一つ言えるのは、これを抑えるために観光に全力を注いでいたということ。少しでも頭の中にこいつが現れると、もうとどめることは出来ないのだ。人間とはそういう生き物に過ぎない。

そう、そいつは、欲望という人間の中に潜む強いものである。

体は、ついにしっかりとランプを磨き始めた。これが今、自分がやりたいことなのであった。努は、頭ではすぐにやめようと思った、しかし、体はいうことを一向にきかなかった。これが正しいことだとも思わなかった。

徐々に部屋中に煙があふれ、辺りが見えなくなった。努の体の震えはピークに達した。変な汗も体中からあふれてきたし、気分も悪くなった。自分で自分が嫌になった。それでも、終わってしまったことを元に戻すことはできない。そう、時間は前には進むがどうあがいたところで、後ろには進まないのである。時間が後ろに進めばいいと思う人間がどれくらいいるだろうか？

しばらくして、煙が収まってくると、見たことのある小さな生き物が努の前に現れた。

「私めをお呼びでしょうか？ご主人様」

「一つ質問をしたい」

「それが願いでございますか？」

「違う。質問と願いは別物だ」

手の次は口が勝手に動き始めた。
「了解いたしました。質問をどうぞ」
「このランプは世界を飛び回るのだな?」
「作用でございます」
「それでは願いを」
努の体は一瞬間をおき空気を吸った。その空気は長らく締め切られていた部屋の空気であまり美味しいものとはいえなかった。
「その世界と言うものの定義をこの、日本、ということにしてくれ」

努は名案だったと思った。今度からこのランプを探すのに海外へ行かなくて済む。そして、海外を探しているライバルを一瞬で払いのけることが出来る。今すぐ一番叶えたい願いを叶えなくとも、努がこのランプを何度も使うことが出来れば、なんだって出来る。それに、別に今すぐ老人に渡す必要などないのだ。老人は使ってはならないと言った。だが、どうだろう?老人にしてみればそのうちランプが戻ってくればどうだっていいのではないか?その過程でランプがどう使われようがいいのではないか?何も世界を滅ぼしたりするために使うのではない。ちょっとした自分の欲求を満たすだけに、ちょっとだけ、そう、ちょっとだけ、数回使ってみるだけなのだ。いずれ老人にランプは返せばそれでいい。

努は、一応これからの旅費の援助も求めるために老人のところへ行かなければならなかった。ただ、それもこれっきりで済むことを努は理解していた。努は元来頭が悪かったわけではない。大学の中退だって成績のことや、出席日数のことではなかった。ただ、この理由を他人に打ち明けたことは一度もなかったため、謎である。

8．新たな旅と自由

「おかえりなさい」

老人は暖かく出迎えてくれた。そして、努がランプは見つからなかったと伝えると老人は少し焦りのようなものを顔に浮かべたが、努を攻めても始まらないと思ったのか、努に明日の夕方もう一度来るように言った。またマシンで位置を特定するということだった。努にしてはこのマシンが手にある以上この老人の干渉をあまり受けたくはなかったが、旅費のためには仕方ないと思った。この旅費にしたって後で老人に返すことが出来るのだとさえ思った。よくよく考えなくてもわかることであるが、なんでも望みを叶えてくれるランプというものは金などには換算できないほどの価値がある。

努はその夜、作戦を立てた。だがそれはスムーズにランプが見つかった場合について考えているのだが・・・。しかし、例え途中で誰かがランプを使ったところでそれほど問題ではない。自分の邪魔をされなければ・・・。でも、誰がランプを使うと言うのだ?例の機関の人間はランプの封印を狙っている。一般人は努を除いてはほぼランプについて知らないであろう。それは努がインターネットをさまよってその情報が見つからなかったことからもわかる。

次の日の夕方。努は、例のカードを持って、老人の家を訪ねた。もう老人の家の前のプチジャングルにもすっかり慣れて、普通の道となんら変わりのないように通過できるようになっていた。ある種の適応というのか、成長というのか・・・。

「どうです変化はありましたか?」

最近、老人は努に挨拶をしない。それは努となじんできたからでもあるだろうが、それよりもランプに関することへの情報が挨拶などをすることよりも老人にとってはるかに重要だからに違いない。そこまで老人がランプの封印にこだわる理由とはなんなのだろう?

それは確かに、悪い人間にこのランプが渡ったときにはどうなることか恐ろしいとは思わないでもないが、現在の状況を考えるに、そこまで焦る必要はないと、努は断定的に考えていた。

「ええ、今度は割りと近くのようですよ」

それはそうである。今、世界という言葉の定義は日本であるのだから、そのランプは日本国内にあるはずである。ランプに直接ここへ飛べだのと指定することは出来ない。それならば、大きな枠から絞ってやろうという、努の閃きによってこうなっているのである。

（じいさんだって、旅費が安く済むからいいのだろう）

「おおそうですか。何たる偶然。こんなに短期間のうちに連続的に近くとは」

「そうですね。ただ、ランプの気まぐれでしょうから・・・」

努はわざとこのように言った。

「さっそく中で位置の特定に入りましょう」

このとき努はふと思い出した。老人にロンドンでランプが見つからなかったことを告げたときに、どんな様子だったか、どこを探したのか、ちゃんと隅々まで探したのか？などということを聞かれなかった。それは努にとって都合のいいことではあったのだが、何か裏があるのではないかと疑うことも出来る。本当にお人よしな老人なのかもしれないが・・・。

いつもの応接室に招かれ、老人はコーヒーを持ってきた。

「お1人ですか？」

「ええ。孫娘は先日帰りましてね。ときどきああやって私のところに遊びにきて、話し相手になってくれたり、家の用事を手伝ってくれたりするのですよ」

「そうですか」

と言って努は微笑んで見せた。自分が作れる精一杯の微笑であった。

「そうですね。方角でいうとこっちだから・・・」

老人は地図を指でなぞりながら、ものさしで長さを計っている。努はその様子をじっと見ている。時々コーヒーを流し込みながら・・・。

「どうやら日本国内のようですね。距離を見ても」

努は作業をしている老人に対して話しかけた。

「そうですね。いや、驚いた」

「過去はもっとあちこちに散らばったりしたのですか？」

「ええ、過酷なときは南極だったりしたこともあったそうです。そこには私は行きませんでしたがね」

「そう考えるとランプを回収するにも好都合ですね、今回は」

「ええ、全くその通りです。明日の昼の飛行機を手配しておきますので朝にいらしてください。日本国内なので場所も本当に具体的に指定できました。前回のロンドンでは少しずれていたんでしょうな。見つからなかったということは」

努は内心ドキリとしながらも老人の話に相槌を打った。

その後、老人とランプについての話をすることはなかったが、たわいもない話に時間を割いた。このとき努は感じたが、この老人は努に心を開いていた。子供の頃、あんなに気難しそうで、変人に見えたあの老人が今、自分と打ち解けてたわいもない話をしていることになにか違和感を覚えずに入られなかった。

次の日の朝、努は前回のロンドンよりはかなり軽装備で老人の家に向かった。老人はいつの間に手配を済ませたのか飛行機のチケットをしっかりと持っていた。

努は近くの空港までタクシーで行った。だが、飛行機の時間まではまだ2時間ほどあった。この時間を利用して、昨夜考えたランプの活用についてもう少し練ってみることにした。そのときの努は、如何に少ない回数で、そして以下に少ない労力でランプを手に入れるかについてしか考えていない状態であった。

そして、昨晩考えていたときに、ふと思った。

（別に世界の定義を日本という広い部分に限定する必要はなかった。自分の部屋などとしておけば永久にそこに存在し続けるのだから・・・。いや、待てよ。日本中くらいにちりばめないとあのじいさんの目はごまかせないだろう。シャインキャッチマシンをもうひとつ持っている可能性も考えられる。そうなると、いつも俺の部屋の辺りを指しているとわかったらランプが回収できていることがばれてしまう。そういうことは、日本のままでいいのだ。おそらくあのときの俺はとっさにそこまで考えて世界の定義を日本としたのであろう。そして、これからは、見つけた現地で出来る限りランプを使ってしまう必要がある。ランプが見つからなかったということをじいさんに相談するかどうかが問題だ。相談すれば金は手に入る。だが、ランプに願いを唱えて金を手に入れれば問題はない。しかし、あまりにも探しに出ている期間が長いとじいさんも不思議に思うだろう。そこは少し考える必要がありそうだ）

と。

そんな中、飛行機の時間がやってきて、努は少ない荷物で乗り込んだ。

1時間ほど経って、冬なのに少し暖かい、ここは日本なのか？と思うような沖縄へとやってきた。本当はこんな風にして沖縄に来たくなかったが、ランプを探しに来たという満足の行く理由があることからこの件に関してはよしとしておこう、と努は思いながらすがすがしい晴れの沖縄を小さなスーツケースを転がしながら歩いていた。どこに行けばいいかということはすでに決まっていた。老人が以前のロンドンのグリニッジのように的確に示してくれた。それはかの有名な首里城であった。努はあっさりとタクシーを拾い、運転手に首里城までと告げ、のんびりとしていた。そして、時間がたってタクシーは首里城前に止まった。

（こんなにことがスムーズに物事が運んでいいものなのか？）

努はそんな風に考えたが、ランプのことを考えるとそんな疑問はどうでもよかった。ランプが手に入るのなら特に問題はなかったからである。

首里城が見渡せる位置から双眼鏡を覗き込み、光を放っているところを探した。すると、グリニッジのときと同じようにすぐに見つかり、努はすぐにそこへ行った。そして、足元にランプを見つけた。この日は平日であったこともあり、一般人はほとんどいなかった。それも努にとって好都合であった。なぜか？それはここでランプの願いをかなえてしまうためである。

9．尽きぬ欲望と怪しい影

「お呼びでしょうか?ご主人様」
いつものように小人が現れた。
「金はいくらまで出せる?」
努は今一番必要なことを願った。これで老人に頼る必要もなくなる。
「日本円だと、１０００万でございます」
「それじゃあ１０００万だ」
「かしこまりました」
小人は一瞬消えた。そして、煙があたりに立ち込めた。煙が晴れると、そこには（おそらく）１０００万円分の札束が無造作に置かれていた。小人はこの金を入れるケースを用意しなかった。それはおそらく願い事の中になかったからであろう。ナンのことにしろ、願い事に忠実であるというか、少し変わった小人だ。しかし、今の努にとってそんなことはどうでもよく、自分の目的が無事に達成できればそれでいいのだった。確かに、今回はこの裸の１０００万円をどのように持って帰るかが問題となってしまったが・・・。自分の持ってきているカバンのサイズではどうにもキレイに収まりそうにない。いかに今が平日の昼間だと言え、こんな大金を裸のまま持っていたのでは物騒であること極まりない。少しずつ分けて運ぶにも、こんな大金をこんなところへ置いてはいけない。努はうれしい悩みにぶつかった。金が多すぎてもてないなどという悩みは日本中探してもほんの少しの人くらいしか持っていないものだろう。
一昔前は、金をばら撒くようなこともあったくらいであったから、こういうことはよくあったのかもしれない。あの頃の日本は少し狂っていたように思う。人間の欲望などよりももっと力を持つ、雰囲気による洗脳とでもいえようか・・・。

努は、仕方なく、自分の荷物の中身を辺りの見えないところに置き、１０００万円を小さなスーツケースに詰めた。スーツケースはパンパンだった。ふたを閉じるのに格闘し、１０分もかかってしまった。

さて、このまま自宅へと帰るわけにもいかない。そもそもこの荷物と金ならどちらを置いていくかという選択の上でこうしているのであって、これらの服などが要らないわけではない。

銀行にこのまま全部持っていったところで怪しまれるに決まっている。これらの金の出所を証明できるものもないし、そもそも本当のことを話したところで信じてもらえるわけがなかった。それはそうだ。努も最初は夢でないかと思ったくらいだ。今は、違う意味で夢のようである。

結局、複数の銀行を回り、複数の講座に１００万円ずつほど分けて貯金をしておいた。まさか、これを貯金という使途で収めるわけがなく、一時的な金庫のようなものである。つまり利息なども考えていない。

あちこちの銀行を回り、それぞれで手続きをしたため、かなり時間を食ってしまった。もうすっかり日が傾きかけていた。努は急いでタクシーを飛ばし、首里城へと戻ったのだが、衣服などの私物はそのままの状態で、どことなくホコリをかぶっているようであったが、問題なかった。言うまでもないが貴重品などは身につけて持っていったため全く問題ない。しかし、これらの衣服などの私物は誰かが触れた形跡もなく、本当にここを離れる前と寸分の違いも見られなかった。

次の日の昼。飛行機に乗り、自宅へと向かった。その機内で、すでに努は、日本地図を広げ次のランプの位置を特定しようと躍起になっていた。周りの視線はさぞかしこの人物を少し変わった人と見たであろう。世間の考える普通の人は、飛行機の中で日本地図をまじまじとは見つめない。ぶつぶつとつぶやかない。

それからというもの、努は、ランプの位置を突き止めては、向かい、そして、あっさりとランプを手に入れる。煙を発生させ願いを叶え満足する。欲しいものは何でも手にいれた。やりたいことはなんでもした。

途中、家族は出張が多すぎることを疑ってはきたが、一生に一度くらいしかないチャンスであると説得を行った。これは後々の言い訳を作るのにいい言い訳であることを努は計算して言ったのであった。次に、老人が一向に自分を訪ねてこない努に対してどんなことを思っているだろうかということも気になった。それはこちらから何かアクションを起こさない限りは全く問題ないと思われた。携帯電話の番号を教えているわけではないからであった。ただし、その老人が自宅を訪ねてくるとすると話は別であったが、あの老人はそういうことをしなさそうだと、努は勝手に考えていた。その考えは、正しかった。老人は、何を考えていて、どういう風に思っているかは全くわからなかったが、努が自宅にいるときには少なくとも訪ねてこなかったし、“出張中”も訪ねてきた形跡がない。帰宅したときに家族が何も言わないからだ。普段、訪ねてこないお隣さんが、努を訪ねるということがあろうことなら、家族は即刻報告するであろう。ひょっとすると、携帯電話にメールなり電話なりをしたであろう。

事は順調に運んでいた。順調だった。そう、なにもかもが。そういう生活がもう半年近く続いていた。そろそろ夏になるかという頃である。それでも、ここまでの時間の流れは努にとってほんの一瞬に過ぎないような感じであった。毎日が旅行で、毎日、欲望が満たされる。人間として自分以上の幸福を得ている人間はいないと、努は思っていた。順風満帆という言葉は自分のためだけにあるのだと

さえ思った。そこらの社長が高級外車に運転手を付けて乗っているのが遊びのようにも見えるし、超高層マンションの最上階に陣取っているような人間はただの高い所好き程度にしか思えなくなってきていた。このときの努の金は十億円程度だった。他の財産を含めればもっと多くなっていた。

努は途中でふと思ったことがあった。それは１０００万円よりも価値のある品物を手に入れ、それを転売するという考えであった。ただし、その考えはすぐに消えた。どう考えても無職の人間が手にいれることの出来るような代物ではないのだから・・・。すぐに怪しまれるに決まっていた。

すでに貯金をするのにも辛くなってきていた。無職であるから一つの銀行に多くの金を預けると怪しまれる。その金をどこで手に入れたかを説明しなければならなくなる。そんな理由内に等しい。そうなるとますます怪しいことになる。

そこで、努は自宅の自分の部屋に大きな金庫を設置し、その中に札束をおさめていった。ここに１億円ほどは入っただろうか？それでもまだまだ金の置き場には困っていた。小人から手に入れた大型トラックなどのコンテナにも金庫を積み込み、そこに金を入れることで足りたのであった。最終的にその結論に至るまでにかなり時間を要した。今度はそのトラックをどこにおいておくかなどの問題も生じたが、月極めの駐車場を偽名で借りることで解決した。別に偽名である必要はなかったかもしれないが・・・。

そう、本当に順風満帆であった。

だが、その順風満帆は４５回目のランプ探しの旅においてもろくも崩れ去ることになるのだった。努は、そのときまで気づかなかったわけではなかったが、目の前のランプと、それにいたる過程があまりにもあっさりとしていたことから、ほぼ警戒心というものを餌

付けされた小動物のように持たなかった。このとき、東京のとある薄暗く、どことなく気味の悪い路地へとやって来ていた。ここが特別であったかというとそうではなく、いつもグリニッジや首里城のようなちゃんとした場所であったわけではない。樹海とも呼べるような森の奥深くに分け入ったこともあったし、山に登ったこともあった。そして、立ち入り禁止である場所にも何度も入っている。何度か警察に見つかりそうになって危なかったところはあったのだが、持ち前の運動神経でなんとか急場をしのいだのだった。

（こんなところで捕まってランプを逃してたまるか）

そういった気持ちであった。

努がいつものようにあっさりとランプを手に入れたときのことであった。ランプはおなじみの青のポリバケツの中にあった。少し臭かったが、それは努にとって問題ではなかった。その場でもう煙を発生させて事を終わらせるからであった。しかし、今回はいつもと違っていた。確かに、いつも同じようなことばかりで単調であるから何か変化が欲しいとは思っていたのであるが、こんな風であって欲しくなかった。

この頃、裏の世間ではランプの存在を知るものが現れてきた。それもかつてのランプハンターが感づいてのものであった。昔のランプハンターの中で成功したものは大きな資金を得た。その資金を使い、巨大な裏組織を作ったりしており、現在はそのボスに君臨する者も少なくはない。ここ数十年はランプの反応がなかった。それはシャインキャッチマシンが全く機能しなかったことからわかっていた。だが、どこかの気まぐれが、久しぶりにシャインキャッチマシンを見てみたところ数値が変化していた、表示されていた、という具合であろうか？とにかく、ランプの”復活”を知ってしまったのである。

これらの人間は、昔は一儲けも二儲けもして、資金にも余裕があ

り、欲しいものも大体はそろえていた。だが、ランプへの欲求は冷めてしまったことはなく、自身で探しにいけなければその部下を使いランプを探しに出かけさせたりするのであった。そのランプがどういった使い方をされるのかは想像を絶するものがあるであろう。現在は裏の世界に君臨する人々のやることであるのだから・・・。

こういった人々は何も日本国内だけにいるのではない。むしろ、日本国内よりも海外に住む人数のほうが圧倒的に多い。

だが、ここ何ヶ月かの何十回かは日本でランプが観測されることがそのうちわかってくるであろうから、これらを日本に呼び寄せてしまうことは安易に想像がつく。

この結果、つまり、努が自分で撒いた種によって、自らの単調なランプ探しに変化が生まれてしまうのであった。努はこのときまで、実感を持って知ることはなかった。

10．黒と赤

「こんにちは。初めまして」

背後から男の声がした。声からもわかるが、どうにも努と仲良くなろうとしている人間の話し方ではなかった。努は、この声に答えなかった。ランプのほうだけを見るようにしていたが、大勢の気配を感じた。こんな薄暗い人通りの少ない路地では他人の助けを求めることも出来ない。大勢の人間の気配は、努を囲むようにして感じられた。

ゆっくりとランプから顔をあげ、前を恐る恐る垣間見る。黒の服に黒のサングラス。そんな男が大勢そこにはいた。一瞬、悲鳴のような声が漏れたような気がした。だが、その声を感知する耳は今、正常に働いていない。足は小刻みに震え、体全体も震えていた。体中は、暑く、そして寒い。こんな感覚、今まで味わったことがなかった。

（やばい、逃げなきゃ・・・）

努がニートをしているのは理由がある。別にその辺をふらつき歩いて、仕事をしたくないだけではない。今となってはそう写ってしまっても仕方がないのであるが、家族にはベンチャービジネスに挑戦中ということにしてあることは周知の通りだ。だから、まだまだ遣り残したことがあるのだ。

（ランプについてこの人たちは知っているのか?それともただ、この場所にいたのがいけなかったのか?）

こんな状況から、この人々と友情が芽生えるなどということは絶対にありえない。ありえない。

（ランプについて知っているとすれば、このランプを渡せば解放してもらえるのか?）

まず、このことを提案してみるべきだったのだろうか、しかし、そんな有無を言う時間など元々ここには存在しなかったのである。

このとき努は、過去にどんなことがあってランプが封印されたかをほんの少しだけ理解できたような気がした。

努の後方で何かの金属音がした。ガチャリというものであった。そして、冷血な笑い声、他人事のような笑い声。その声と供に、一気に努の後頭部に重いものがぐいっと押さえつけられた。その断面は円形のようであったが、それほど大きな円ではなかった。何か棒のようなものであろうか？つつかれているような感覚でもある。いや、こんな考えは現実逃避に過ぎない。努はすべて理解している。今、自分が置かれている状況。そして、この状況の原因を・・・。

目が覚めたときには、病院のベッドにいた。東京の病院だろうか。努を覗き込んでいる家族。そこに例の老人の姿はない。家族は皆、安堵の表情を浮かべると供に、涙、怒り、などさまざまな感情がごじゃまぜになって努に降り注いできた。それは何度も何度も繰り返され、止まることはなかった。努は、その状況自体は理解できるものの、ここに至る過程を全く理解できていない。ここに至るまでに何がどうなっていたのか。どこまでが本当で、どこからが嘘なのか。とにかく、こんなベッドでじっとしているわけにはいかないと、起き上がろうとした。だが、腰、腕に激痛が走り、その場から動くことが出来なかった。

しばらくして、医者がやってきて、山は越えたと言った。そして、家族にいったん病室の外に出るように言った。医者は努に、話せるかと聞いた。努は声を出そうとした。何度も、しかし、出ない。

1週間後、努の体は回復してきていた。この日の午後になって、見知らぬ男が病室へと入ってきた。努はそれを見て、何が起こったのかと思った。その男は警察手帳を片手に自己紹介を始めた。その男は刑事だとわかった。

そして、刑事は、努に対して、質問を始めた。
「面倒なので単刀直入に質問します。誰にやられたのですか?」
「やられた?」
「ああ、覚えてらっしゃらない?」
「何のことですか?」
努は、本当に何もわからなかった。思い出したくなかっただけかもしれないが・・・。
「わかりました」
刑事は一呼吸置いて、何かを心の中で決心したようであった。そして、話の続きを始めた。
「あなたは、この病院から15キロほどのところの裏路地に血を流して倒れているところを通行人に発見された。そして、ここに・・・」
努は、思い出した。完全に。そこで何が起こったのかも。自分が意識を失うまで何が起こったかを思い出した。だが、そのとたんに頭が痛んだ。ズキズキと。この記憶は、思い出したくないものなのだ。体全体でそう警告している。そして、次に出てくる考えもわかった。
(信じてもらえない・・・)
こうなれば、考えるしかない。その状況に至った過程を。ただ、事件現場の状況などは調べてあるだろうから下手なことは言えない。嘘だと見抜かれてしまう。いや、ここで嘘をつく必要はないのではないか?ランプのことを除けば、問題ない。もっとも、それを入れたところで、意識が朦朧として幻覚でも見たのだろうと判断されて片付けられてしまうに過ぎないであろう。それはそれで努には都合のいいことではあったが、やはり、ランプのことは言わないでおくほがいいと思った。それは、今の努の身のことだけを考えてではない。
「あの日、初めての東京で道に迷ってしまい、薄暗い路地裏に迷い

込んでしまいました」

刑事は、なるほどといった表情で努の話を紙にメモしている。この紙という媒体はいつまで続くのだろうかと常に思っていた。普段からもっぱらパソコンばかりを使っているせいもあるのだが、この紙というのが如何に扱いにくいかを努は小学生のときにすでに嫌気が指している。何の折り目もついていない紙をランドセルに入れて家まで持ち運ぶ。どうしてこの作業の過程で紙が見るも無残な形に折りたたまれる（という表現は適切でないが・・・）のであろうか？どうして水に少しでも濡れると元の姿に戻らないのだろうか？そんなどうでもいいような理由であった。

それはさておき、努は話を続けた。途中まで・・・。

「すると急に後ろから拳銃を突きつけられたのです。おそらく通り魔的なものではないかと。後頭部でした。このままではダメだと思い、その場に伏せました」

「なぜ逃げなかったのです？」

「あのような状況に追い込まれてはそのような平常な思考は働きません。それに・・・」

といいかけて努は言葉に詰まった。

「それに？」

そこには大勢いて、自分を囲んでいた、というと刑事はどう思うだろうか？いや、それはすでに足跡などの採取からわかっていることなのであろうか？

「複数人いて、とても抵抗できる状況ではありませんでした。それで、その場でじっとすることにしたのです」

「そうですか。それで、撃たれましたね？そこは覚えていますか？」

「ええ、かすかにですが、後頭部は外れたということだけ覚えています」

「わかりました」

これくらいが重要な会話であっただろう。そのほかにもこの刑事

は努に対していろいろと質問を重ねたが、これらの会話ほど重要なものではなかった。ただ、「何しに東京に来ていたのか」という質問に関しては言葉に詰まり、急に頭が痛くなった演技をした。そこで、質疑応答は終了した。この刑事は仕方なさそうに、「お大事に」と言って病室を出た。

（またここに来て、いろいろと話を聞かれるのだろうか？この話はテレビでは流れているのだろうか？そのときに俺の名前はテレビに出てしまっているのだろうか？）

いや、こんなことはどうでもいいのかもしれない。もっと重要なことがあった。

（家族になんと言えばいいのか・・・）

11．「まえ」と「あと」

それなりに落ち着きを取り戻してきた。その日は母と二人きりで病室にいた。あの事件以来、家族とろくに口をきいていない。それは家族が努に対して怒っているからかもしれない。失望しているからかもしれない。もう縁を切りたいと思っているのかもしれない。そんな風にマイナスのことしか考えられなかった。努はそんな自分が嫌だった。家族に嫌われるためにここまでいろいろとやってきたのではないのだと。それだけはわかって欲しかった。もちろん言わなければ伝わらないのだが、言ったところでわかってくれないだろうと努は最初から決め付けていた。

母の横顔はどこか暖かさがあったが、冷たさもあった。それは努が主観的に感じたことで、母の心境を表しているものではないと思われる。こうしている時間が途方もなく長く感じられた。そして、ついに耐えかねて口を開いた。

「ねぇ、母さん」

返事はなかった。寝ているのだろうか。病室の窓のほうに体を向けてうつむいていた。努はもう一度呼ぼうと思ったが、何かがそれをやめさせた。

しばらくたって、母は心を決めたように、震えた声で、しかし、しっかりとした声で、窓に向かって言った。

「もうやめなさい」

母はどこまでを知っていてどこを知らないのだろうか？努がこういう生活をしていること、それは誰にも話したことのないことであるから努以外の人間は一応、知らないはずである。ただ、このときの母はすべてを知っているようで、本当に短い言葉ではあったが、努には重みが十分に感じられた。

その後、母と会話を交わすことはなく、また、病院での長い孤独な夜が始まった。「もうやめなさい」とは何を意味していたのか？危ない仕事をしていると思っているのだろうか？それとももっと何かを知っているのだろうか？物音一つなく、窓からの月明かりだけがはっきりとわかるこの病室で、寂しさ以外のものを味わうことはなかった。欲しいものは手に入れている。なのに何か寂しさが残る。

（なぜだ？）

努は思い出した。あの日の出来事を。鮮明に。そして悟った。すでにランプの存在は一部の人間に知れ渡っていて、狙っているものがいることを。ランプを手に入れるためには手段を選ばない集団もそのうちの一つであると。今まで自分はあのランプで好き放題やってきた。

（自分さえよければそれでよかったのか？他人がどうなってもよかったのか？いや、他人に迷惑はかけていないはず。そうか？今、こうして横になっているのは・・・）

1週間後、怪我もほぼ回復し、自力で不自由なく生活が送れるまでになった。

さらに2週間後、退院することができた。これはとてもうれしいことではあったが、何かもやもやとしたものが心の中から抜け出していくことはなかった。何かを忘れている。自分が自分でないようだった。

（そう、それだ。俺は俺でなくなっていた）

入院している間、ランプ探しにまた出かけるべきかどうかを考えた。欲しいものの大体は手に入れた。金も十分だ。しかし、当初考えたランプの計画は終わっていない。まだあと何回もあれを使わねばならない。努ではなくて、努の体があのランプを求めている。光り輝く・・・。あの光を全身に浴びたい。あの小人に会いたい。しかし、努は知っている。それが目的ではない。その小人に会った後

が重要なのだと。それだけのためにランプを探しているのだと。

思案の末、一旦、家族にあの財産の一部を渡すことを決心した。それは努がやりたかったことのうちの一つであった。金を手に入れ家族を楽にしてやりたいと常に思っていた。それとは裏腹な結果が過去に何度あったことだろうか。そのたびに体の中の野獣が吼えた。その野獣を抑えるためにあらゆることで気を紛らした。家族に悟られぬように・・・。

「そんなもの、いらない」

それは努には死刑を宣告されたことと同じように思えた。なぜそんな言葉が出てきたのか理解が出来なかった。あれだけ欲しいと思っていたものであろうに、どうして目の前にして断るのか？努は全く理解できなかった。

「そんなお金、いらないのよ」

母はその言葉を繰り返し、目から大粒の雫を音もなく落とした。努はどうしていいかわからなかった。努は、母が笑顔で「ありがとう、助かるわ」と言ってくれるとばかり思っていた。あれほど必要だった金が手に入るのだから。今まで浪費してきた分の何倍も返しているのだから・・・。

「あんたは大学を辞めるべきじゃなかった。そうよ」

「だって・・・」

「知ってる。どうしてあんたが大学を辞めたのかも。それに、その後、どんなことをしようとしていたのかも。全部わかって、受け入れてあげるつもりだった。受け入れているつもりだった。わかってあげているつもりだった」

母の目は本気だった。そして、口調も厳しかった。

「何がわかるって言うんだよ」

「私が欲しいのはお金なんかじゃない」
「何か勘違いしてないか？」
「あんたにはこんな風になって欲しくなかった」
母は混乱している努を見て、はっとして急に優しくなった。それでも、どこか失望を抱いていた。
「確かにね、お金はあったほうがいいのよ、でもね」
「でも？」
「もっと大切なものがあるのよ。お金よりも。お金が多少なくったってなんとでもなるの。だから、あんたには、父さんが失業したって大学に通い続けて欲しかったの」
努は、驚いて後ろに吹き飛びそうであった。どうして一度も口にしたことのない、大学を辞めた理由を知っているのか。
「どうしてそれを？」
「バカね。あんたの母親何年やってると思ってるのよ。あんたはね、優しい子なのは知ってるのよ。このお金だってそう。それをあらわしてるじゃない。見てたらわかるわよ」
「じゃあどうして？」
「わかるでしょう？あんたはお金じゃ買えない大切なものを見落としてるの・・・」
母の声は終始震えているが、失望の念よりもだんだんと愛情がこみ上げてくるようであった。努はその愛情を全身で感じ取った。体中の細胞が解放されていくのがわかった。目元がゆるくなり、努の目から大粒の雫が流れた。この感覚は久しぶりだと思った。ここ数ヶ月はすべて楽しいことばかりだった。自分のやりたいこととやりたいままにやってきた。なにも不自由しなかった。でも、それは自分だけだったのだ。誰にも迷惑はかけていないと思っていた。しかし、家族、あの老人にはどうだろうか？迷惑をかけていないと自信を持って言い切れるのだろうか？

12．反省と修正

努は、母を残して家を飛び出した。どこへ行くのか？それは定かではない。自然と体が動いたのだ。しかし、その体を動かしているのは今までの欲望なんかではない。もっと高尚なものだ。

玄関のドアをたたいた。中から久しぶりに顔を合わせる老人が出てきて、一瞬びっくりしたようであったが、すぐにいつもの応接室へと招き入れてくれた。老人は以前と全く変わっていなかった。努に対する接し方も決して以前と変わっていない。

（しばらく無断で連絡をとらなかったことをなんとも思っていないのだろうか？いや、そんなはずは・・・）

努は、数ヶ月前の光景を思い出した。封筒に入った札束。目の前で頭を下げる老人。今度、それが逆になろうとは思いもしなかった。努は老人の前で頭を下げていた。老人がランプを使わずに持ってくるように言った意味がようやくわかった。しかし、遅すぎた。もうここまで行ってしまうと、死んでも償えない。努は老人に、すべてを話した。ロンドンですでにランプを見つけたこと。それから何度もランプを使ったこと。老人を裏切ったこと・・・。

こんなことをされて普通の人間なら絶対に怒り狂うだろう。殴っても気がすまないだろう。努は大変なことをしでかしてしまったのであるから。それなのに、老人は、落ち着いて、努に頭を上げるように言った。

「仕方ありません。仕方ありません・・・」

老人はずっとその言葉を繰り返した。

しばらくして、老人は努を説得し、ようやくソファに座らせることに成功した。コーヒーを持ってきて、ゆっくりと話を始めた。

「こうなってしまうのではないかと思いながらも、あなたにランプ探しを依頼した私の責任です」

老人はいつも欲がなく、年齢などというつまらない上下関係などにもとらわれていなかった。努を1人の同じ人間として扱っている。努はそれがたまらなくうれしかった。それは、最初に会ったときからそうであった。

「こうなってしまってはもう何も隠すこともないでしょう。ランプを回収する機関があると申しましたが、あれは真っ赤な嘘です。そのような機関は存在しません。シャインキャッチマシンが研究者によって開発されたのは事実ですが、最初から裏ルートで販売されていました。ランプのことを知るのはその時代でもごく一部でしたから・・・。一般人はもちろんのこと知りませんでした。しかし、私は、ちょっとしたことからランプの存在を知り、その魅力に取り付かれ、シャインキャッチマシンを購入しました。値段は高かったのですが、そんなものランプを手に入れればどうでもいいということは、よくおわかりでしょう。そして、私も、ちょうどあなたくらいの頃、同じように好きなことを好きなだけやりました。しかし、今回のこととは違って、ランプを狙う人間がもっと多くいたのが事実ですから、醜い争いが起こりました。その中で死んでいく者、殺人を犯す者、それは本当に人間の仕業ではないかのようでした。獣とも呼べましょうか。つまり、欲望、これに支配されていたのです。私は、何度もランプを手にいれ、願いを叶え、最終的に嫁を向かえ、娘まで授かりました。そして、この屋敷を建てて、それはそれは人生の絶頂期だとそのときは思っていました。しかし、そんな簡単に手に入れた幸福などというものはもろいものです。ランプのせいで完璧に欲望に取り付かれた私は、周りの何もが見えていませんでした。そして、そんな私が嫌になった妻は娘を連れて家を出て行きました。それは正しいことだったと思っています。そのときの私は獣でしかなかったのですから・・・。それに、妻が出て行った後、ランプの争いはランプのないところですら起こるようになり、もし私

と一緒にいたなら命の危険が及んだでしょう。私も、あなたと同じように、死と隣り合わせになったこともあります。それでもランプを求めました。今度は不死の体を手に入れるんだって。もちろんそんなこと間違っているのです。それに気づいたのは相当後のことでした。そして、それに気づいてから、私はランプを命を懸けて探しました。今までの行いを反省するために。ランプを封印するために。その頃、私が出来る精一杯のことだったのです。最終的にランプの封印には成功しました。前にも申しましたが、それは５０年前のことです。しかし、ご存知の通り、ランプはそれから５０年後また地上に舞い戻ってきました。なぜランプがでてきたのかはわかりませんが、それを偶然あなたが見つけ、ランプの秘密を知った。後はあなたのほうがよくお分かりでしょう。

　ここからの話は余談かもしれませんが・・・。妻は私の元を離れた後、しばらくして病気で亡くなりました。そのときはすでにランプの封印を終えていましたが・・・。それから娘を私の家に引き取り、最終的に嫁に行っていました。結婚して間もなく、娘は私の孫娘に当たる子を出産し、今ではその孫娘がときどき遊びにきてくれるのですよ。これだけが今の生き甲斐ですよ。ランプに振り回された人生ではありましたけど、孫娘の顔を見るとそんなことは忘れてしまいますよ」

「最後にお聞きしますが、どうして私をランプの回収に向かわせたのですか？」

「その点ではあなたに謝らなければなりませんね。申し訳ありません。あんなにひどい目にあわせてしまって申し訳ありませんでした。

　もちろん、最初は無職と聞いてとても任せられたものじゃないと思いました。しかしですね、私がお金を差し出したときにあなたは突っぱねたでしょう？私はその行動に少しばかりの望みを持ちたかったのです。ランプとの戦いにおいて一番重要なのが、欲望をいか

に抑えるかと言うことですからね。職業が云々ではないのですから・・・」

老人はゆっくりと、そして、一気に話を終えた。そして、少し冷めてしまったコーヒーを口へ運んだ。努も、それに合わせた。静かで、ゆったりとした空気と時間が流れている。しかし、努の体内には熱いものが流れていた。コーヒーではなく・・・。熱い、熱いものであった。それは使い方を間違うと獣と化すだろう。うまく使えば、原動力となる。それは、情熱だ。努は、この老人が自分の行いを反省し、少しでも償うためにランプの封印を図った。そのためにランプを見つけるのは本当に命がけだったと思う。でも、それくらいのことをしないとこの罪を償うことはできないのだと努は悟っていた。そして、今、自分には何が出来るのだろうか?ランプを見つけてからそれを考えるのでは遅い。欲望に負けてしまうかもしれない。今、一刻も早くそれを考えなければならない。

努はＳＦ小説が好きだった。

(そんなことを考えたって仕方がない。何になると言うんだ?・・・)

二人のコーヒーがカップの中からなくなった。

「一つだけ質問してもいいですか?」

「ええ、いくらでもどうぞ。もう隠すことはありませんし」

「ランプがなぜかわからないが地上に舞い戻ったとおっしゃいましたね?」

「ええ」

「ランプを封印した後、そのランプがしっかりと封印されているままであるかどうかなどを確認しましたか?」

「いえ、それは怖くて出来なかったのです。また、欲望に支配されてしまうのではないかと。時間の流れというのは恐ろしい。記憶をすべて消し去り、過去のことをなかったことにすらしてしまう・・・」

（時間の流れ・・・、記憶、なかったことに・・・）
努の脳がガンガンと刺激されるのがわかった。それと同時にものすごい自信が生まれてきた。
（行ける！）

それは、欲望などという低俗なものに支配されている状況などとは比べ物にならないくらい、人間らしい、本来あるべき姿。人間と獣の違いを明確にするのはこの部分であると言っても過言ではないだろう。

努は、人生において、ここまで体中から純粋なエネルギーが生まれたことはなかった。必死で勉強した高校時代。有名な大学に入学することも出来た。大学でも学費を出してくれている親に「よかった」と思ってもらえるように、必死に勉強に励んだ。それは、努の親に対する愛情によるものであった。それももちろんすばらしいエネルギーであった。ただ、途中で方向を間違った。親に苦労をかけないことだけが親に対する愛情なのではないのだと、遅すぎるが、今になってようやく気づいたのである。過去の出来事は、どう悔やんだって元には戻りやしない。修正できやしない。
「お金じゃ買えない大切なものを見落としている」
この母の言葉が身にしみる。

痛い。痛い。痛い。

頭が？

腕が？

脚が？

もちろん違う。心が痛いのだ。獣は心を持たない。自分の生きる

ためだったら平気で殺戮を繰り返す。それに対して決して悪いと思うことはない。それは獣が欲望に支配されているから。それが、本能だから。

しかし人間は違う。本能のままに生きることは本当に楽しいことだとは言えない。苦労は買ってでもしろ。そういうことだ。

努は去り際に、老人に向かって力強く言った。

「6年前でポストをチェックしてください。きっと、きっと手紙を書きます。絶対に忘れないでください。そして、その手紙を絶対に読んでください」

老人は、ただただ、こくりと頷いた。すべてを理解したかのように。いや、すべてを理解したのだろう。

13．最後の旅と再起への旅

シャインキャッチマシンは、努の最後のたびの目的地を富士山頂に設定した。もちろん金銭的余裕もあったため、ヘリコプターなりをチャーターして向かえばすぐである。老人がそういう風に提案したにもかかわらず、努はかたくなにそれを拒み、徒歩での登山を目指した。今までほとんど登山経験などない努にとってはまさに命がけの旅であった。山頂は果てしなく遠い、決して楽な道のりではない。それは十分にわかっていた。幸いなことに季節が夏であるだけましであった。それでも高度が上がるにつれて気温が低くなり、坂を上るということ以上のエネルギーを消費するだろうことは容易に想像がつく。

努は、大きな荷物を背負い、杖を片手に山頂を目指していた。それは確かに遅い手段ではある。ヘリコプターなどで行ったほうが絶対にいいに決まっている。着陸するところがないならロープで降りればいいのだから・・・。それでも、努は決して徒歩で山頂を目指すことを変えようとはしなかった。もちろんのこと、他のランプを狙っている連中がヘリコプターなどで先を越してしまう恐れがあることは重々承知であった。しかし、努には、命を掛けて成し遂げないと意味がないと思っていた。

登山を開始してから、多少の休憩は取っているものの、ろくに睡眠もとらず、体はぼろぼろの状態であった。ガイドなども付けなかったため、自分ですべての管理をしなければならなかった。体のこと、食事のこと。努はそれを他人に頼んでやってもらうことがある種の甘えであるとすら思っていた。

登山を開始して何日目だろうか?努にはそれは定かではなかった。

ただ、がむしゃらに登り、山頂を目指していたのであったが、ここまでの好天はどこへやら、この日はひどい雨風だった。

（もっと登れば雲の上くらいになって雨なんて関係なくなるだろう）

そんな安易な考えを持ちつつも、これが原動力となり、他の登山者は山小屋に退避するような状況においてさえも、努は登り続けた。このとき、まだシャインキャッチマシンは富士山頂を示していた。他のランプハンターたちはどこを探しているのだろうか？とっくにこんなところのもの回収できてしまうのではないか？

ただ、今日からは数日間天気が思わしくないらしく、ヘリコプターなどは飛べない状況となっているようだった。努にとっては不幸中の幸い。到着したときにランプがある確率がぐっと高まるのである。

しかし、努のぼろぼろの体にはこたえる。意気込みもむなしく、気持ちだけは前に進んでいくものの、体が思うように動かなくなっていた。今、努を動かそうとしているのは熱い気持ちであって、欲望などというレベルの低いものではない。だからこそ、限界というものがやってくるのかもしれない。この熱が冷めてしまったら努はここで崩れるだろう。それと同時に、努が成し遂げようとしたこともすべて崩れ去ってしまう。それだけは努は耐えられなかった。自分がここで死んだところで何の償いにもならないことは十分すぎるくらいわかっていた。

一歩、一歩、そして、また一歩。ゆっくりとではあるが、確実に明るいこの先へと歩みを進めていた。いつの間にか、天候は回復していた。いや、回復していたのではない。雲を抜けたと言ったほうが正しいだろうか？

実際、どちらなのか努にはわからなかった。しかし、そんなことはどちらでもよく、むしろ、少しでも早くランプにたどり着いて目的を達成させたかった。

この時点で、もう何日、山を登り続けているのかは完璧にわから

なくなっていた。ただ、シャインキャッチマシンがまだ富士山頂を指している、それだけが今の努の原動力であった。

徐々に今まで前方見えていた坂がなくなっていくのがわかった。そう、やっと、やっと目的が達成されようとしているのである。ここまで、何度も己の人生を振り返り、何度も自分が嫌になって叫びそうになった。そのたびに努は自分の体に鞭を打つことによって、己の過ちを正していった。もちろんそんなことで、過ぎ去った過去が修正されるはずがない。それは十分にわかっていた。それでも、現在の状態において、忌まわしい過去の行いをできるだけのことをやって正したいと思ったのだ。

まばゆい光、魅惑の光、悪魔の光、・・・。そんなものを放つ物体を今、手に取った。辺りに人はそれほど多くなかった。今は平日だろうか?そんなことを考える余裕すら出来ていた。もうこれ以上歩く必要はない。おそらく、誰かに命を狙われる、いや、この物体を横取りされる心配もないだろう。これは努の勝手な勘ではあったが、間違ってはいなかった。

一呼吸置いて、努は富士山頂でランプを丁寧にこすった。

ランプが一層輝きを増したかのようであった。

努は、熱心にそのランプをこすった。

見慣れた煙が努をやさしく包んだ。今までとは違う感覚。何か体全体が中に浮いているかのようであった。今、どっちが上で、どっちが下。どっちが右で、どっちが左か。それすらわからない状態に

なっていた。そして、自分が生きているのかどうかさえも。
努は渾身の力を振り絞って声を発した。しかし、その声は努の耳には届かなかった。自分の口から発した音であるのに、すぐそばにある耳にすらその声は届かなかった。もう、努にはそれくらいの体力しか残っていなかった。

もう、どうなってもいいと思った。実際それではやろうとしていることの半分も終わらないのであるが、この願いを小人に伝えないよりはましであると思った。これは自分のためではないが、自分のためでもある。こんなことは人生において反則だと言われても仕方がない。その覚悟は決めていた。後ろ指を差されようと、自分は自分で、自分らしく生きていけばいいんだ、そう思った。

そして、
「6年前へ!」
顔が苦痛にゆがみ、全身の力が抜けていくのを感じた。日本において、ここはあるとすれば、一番天国に近い場所だ。すぐに楽になれる。それでいいのだろうか?目的は完全に達成されないままでもいいのだろうか?

体がまるで水の中に浮かんでいるかのように、無重力状態の中に入るかのように、自由自在に動いていた。そんなに力を入れていないのに・・・。息を止めていたが、息が出来ることに気づいた。目も開けてみると、あたりは明るいことに気づいた。だがそこはすでに富士山頂ではなかった。3次元の空間ではないかのようであった。しかし、どこかへと向かっている。自分の意思とは関係無しに、努の体はどこかへと向かっている。いや、吸い寄せられている。

１４．最後の願いと手紙

目が覚めると天井が見えた。ゆっくりとあたりを見渡すとそこは病院のようであった。腕には管が通され、普通に身動きが取れないような状態であった。

（俺は、あのあと・・・）

記憶がなかった。気絶する寸前の記憶が失われることは前回にもあったので、そのうちわかるだろうというくらいの簡単な気持ちでそのまま瞼を下ろし、眠りに落ちた。

深く・・・

深く・・・

次に目が覚めたとき、母親がベッドのそばの椅子に座って、誰が持ってきたのかわからないが、花瓶の花を眺めて、時々手入れをするしぐさを見せていた。努は、声を掛けようと思った。だが、その言葉が出てこない。一番身近な人であるのに、このときばかりは一番遠い存在に感じていた。実際の空間的な距離は数メートルもないだろう。心の中にある、深い深い溝はメジャーなどでは計れない。

結局、声を掛けられなかった努は、母の姿をただただ眺めていることしか出来なかった。そのときに、いろいろと思い出したことがあった。大金を差し出したときに「そんなもの、いらない」と言った母。努のことをすべてわかって、見守ってくれた母。決していやな顔一つ見せず、努に接してくれた母。嘘だとわかっていながら、その嘘にだまされていた母。本当にバカな母。かけがえのない、たった一人の母。そして、努の勝手に振り回された家族。

努の目からは大粒の涙が枕に向かって流れていた。

一滴、そして一滴

少しずつではあるが、その落ちていく間隔は段短と短くなり、滝のようになったのではないかと思われるくらいになったとき、母が努のほうを向いた。その瞬間、努は慌てて顔をそらした。この顔を見られたくはなかった。後で考えるとこんなことはどうだっていいことだったのだが・・・。

「気がついたのね？よかったぁ」

努は横になったまま、母に背を向けていた。

「それにしても、倒れたって言うから何事かと思ったわよ。心配させないでよね」

努の涙は止まらなかった。誰かが蛇口を壊したようだった。早く元栓を閉じなければ・・・。

「熱中症ってね。でもね、お医者さんは本当にひどい状態だと死に至ることもあるとかって言ってたわ。がんばるのもいいけど、ほどほどにね。あんたはいつもがんばりすぎるんだから」

（思い出した）

２１歳のときの7月。大学の体育の授業中にはしゃぎすぎて水分補給も忘れてサッカーをしていたとき、脱水症状と熱中症のために俺は倒れたのだった。担架で運ばれ、念のために病院へと搬送された。格好悪いったらなかったと急に恥ずかしくもなった。

現在の自分のおかれている状況を完全に理解し、今までのことに筋が通ったのはこの3日後であった。これくらいのロスタイムは大きな問題にはならないのだが、えらく時間がかかったものだと思っ

た。これで、例の最終計画を実行できる。

～おじいさんへ～

私は、槍本　努と申します。突然のお手紙失礼します。

私は、未来の世界でランプの存在を知り、心をランプに、いえ、己の欲望によって支配されました。単刀直入に申しますと、おじいさんが、今、厳重に封印しているランプはこれから6年後くらいに地上に舞い戻ってしまいます。ぜひ、今一度ランプの状態を確認し、これ以降も、封印を守ってください。私に協力できることなどほとんどないでしょうが、もし、何かのお役に立てるようなことがありましたら、喜んで協力させていただきます。

それでは失礼いたします。

～槍本　努～

あまり手紙を書いたことなどなかったので、これで失礼がないのかどうかはよくわからなかったが、内容が伝わればそれでいいと思った。無理に変な言葉を並べて飾るよりはよっぽど自分らしくていいではないか。

手紙を隣の老人の家へ届けに行った時にふと思った。老人は自分のことを覚えているだろうか？もちろん隣人であるから、誰であるかは知っているはず。だが、あのランプの惨劇の記憶が残っているかどうか。不思議と自分の記憶は残っている。しかし、どうやら母親の記憶は残っていないようだったし、老人もきっとそうだろう。

それでもいい。きっとこの手紙が何かの役に立つんだ。根拠のないそんな自信が体中から沸いて出ていた。

努は、あれから6年前に戻り、あの老人へランプの封印の手紙を出すという最終的な目的を達成した。いや、これですべてが終わりではない。この後、訪れる父親の失業。これで大学を辞めてしまったのが人生においての間違いだった。ここから軌道修正してやり直していく。これが達成できて、本当にこの6年のバックが意味を成すのである。

確かに、人生をやりなおす、過去のことをなかったことにする。こんなことが許されることだとは思わない。それでも、今の自分、その他、人間にとって必要なことだと思ったから、そして、実際に必要であったから努は6年前に戻った。

二度とこの世に魔のランプが現れることはなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4287f/

煙に願いを

2010年10月8日15時33分発行